

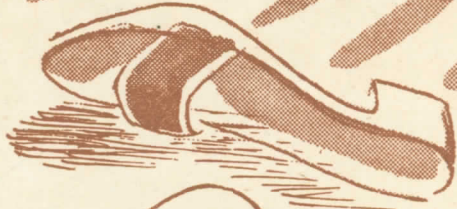
演劇映画綜合雜誌

道頓堀

第四十年 後奉公特輯

昭和十四年十月廿五日第三號
昭和十四年八月十五日發行
（每月發行）
（每百五十三號）





Hiro



海でも落ちない

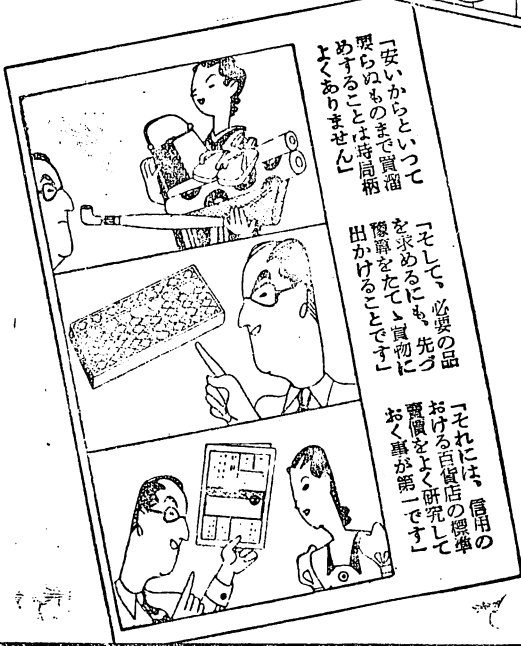
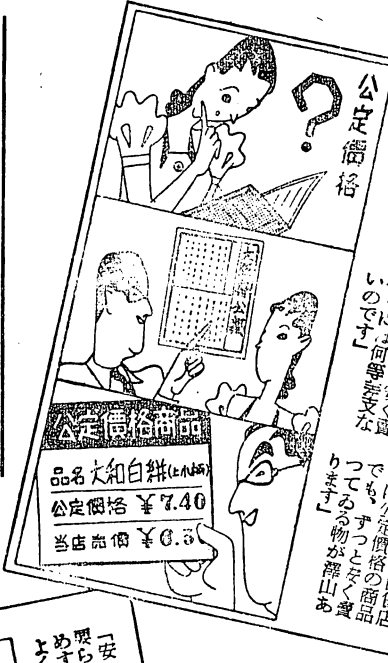
- 青い空と波の海で、真先に目に入るのは口紅の赤です。まだらにハゲてゐる口紅ほど、下品さを廣告するものはない。
- いくら落ちないと言つても、安心して海へ入れない、お茶もいたゞきかねる口紅らしくない口紅が案外に多いらしい。
- ところが、カガシ口紅ならその點大丈夫、唯一の本當に落ちない本格的な口紅、好みのよい色艶、素晴らしい香氣です

8色

カガシ 口紅

新發賣 ツートン2種・ローズ・オレンジ

公定価格の認識を深めま
せう
必要な品を買ふにも豫算
を立てませう



大阪・心齋橋

そごう

目次 道頓堀 第一百五十三號

★ 銃後奉公特輯 ★

國策の線に	實川延若(二)
弟とたばこ	嵐吉三郎(三)
半島の同胞	市川段猿(三)
ラヂオ体操	淺尾奥山(四)
銃後のつとめ	市川九團次(五)
國策通帳	實川八百藏(五)
戦線の友	市川玉太郎(六)
徒歩と貯金箱	中村芳子(七)
舞臺裏から	石河薰(八)
日の丸の小旗	曾我廼家五郎(九)
洗濯献金	曾我廼家小次郎(一〇)

◆ 國策を作る芝居 山上貞一(二)

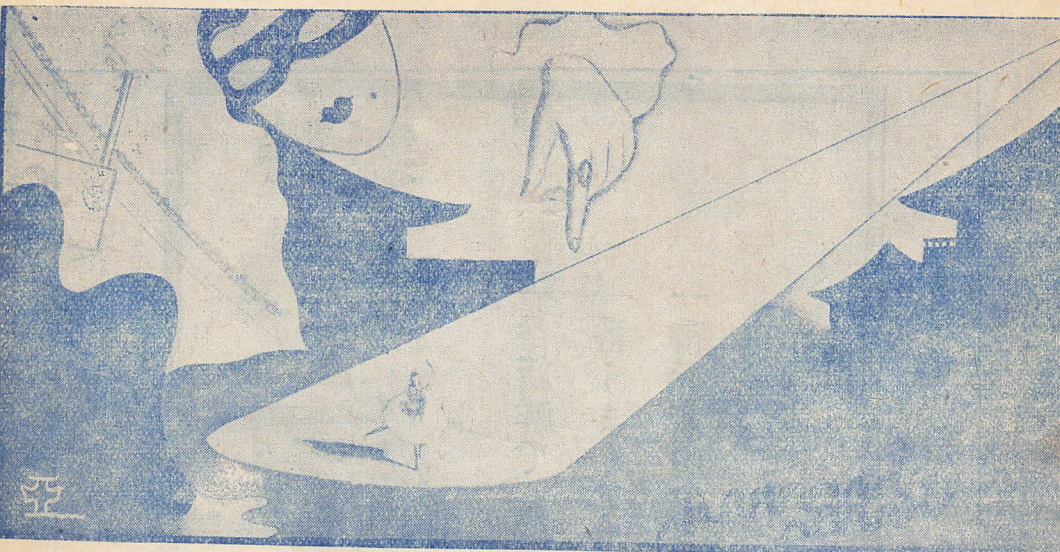
◆ 涼線を行く芝居國 ◆

◆ 秋を背景にした舞踊劇 渥美清太郎(三)

◆ 淺茅ヶ宿其他 額田六福(五)

◆ 舞臺の月 西尾福三郎(六)

◆ 尊王 俠客 加島屋燕石 篠山吟葉(八)



◆ 何となく……………(隨筆)…………… 食滿南北(二〇)

◆ 初秋……………(短歌)…………… 木村富子(二八)

劇 ◆ 四谷怪談と辨慶上使…………… 菱田正男(三三)

評 ◆ 家庭劇の印象…………… 中井浩水(三四)

□ 笑ひの玉國…………… 脇屋光伸(二六)

◆ 道頓堀十五年(三)…………… 鳥江鏡也(二九)

◆ 道頓堀の思ひ出話…………… 大川澱江(三三)

◆ 近世上方名優傳中村宗十郎(四)…………… 高谷伸(三五)

□ 七月のアルバム……………(三六) □ 後記……………(五六)

◇ 口 繪 ◇

◆ 神戸松竹劇場・東西合同大歌舞伎・保名・保名 尾上菊五郎 □ 春日の局・春日の局中
 村梅玉 ◆ 大阪歌舞伎座・曾我廼家五郎劇・海・漁師五郎・美人桃蝶 □ 夕焼小燒舞
 臺面 □ 女の味方・畑山茂吉五郎 ◆ 京都南座・松竹家庭劇・エアロンの花嫁・八百屋
 の主人小織・女中石河 □ 寶の土用ぼし・會社員石野 十吾・妻ふじ子千榮子 □ 十
 三字の幽霊・旅の者重平 十吾・同喜六 天外・伊勢屋惣兵衛 淡海 ◆ 中座松竹笑ひの
 王國・松宮照枝・生駒雷遊・關時男 ◆ 角座不二洋子一座・模範孝女の殺人・辯護士末實
 洋子 ◆ 七月の浪花座 梅澤昇一座 三森石松舞臺面 ◆ 七月の歌舞伎座 いろは假名四谷
 怪談 隠亡堀の場舞臺面

特製

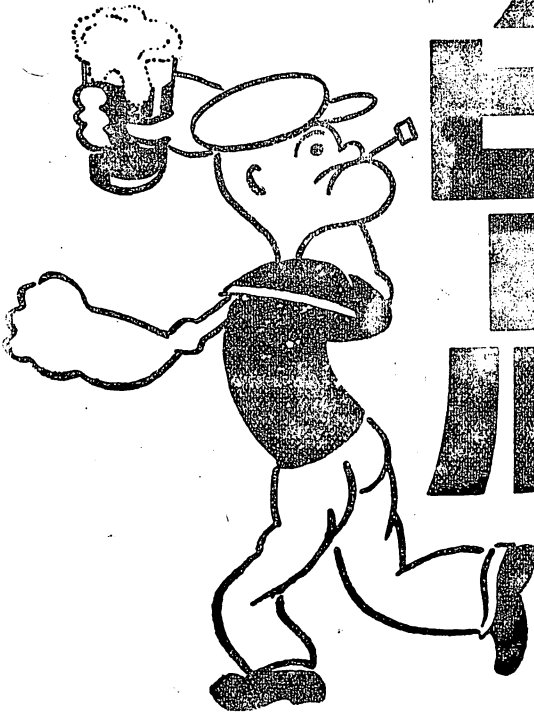
サ
ク
ラ
ズ
ビ
ー
ル

一番新鮮で

一番うまくて

一番元氣の出る

(品質)
一等のビールだ

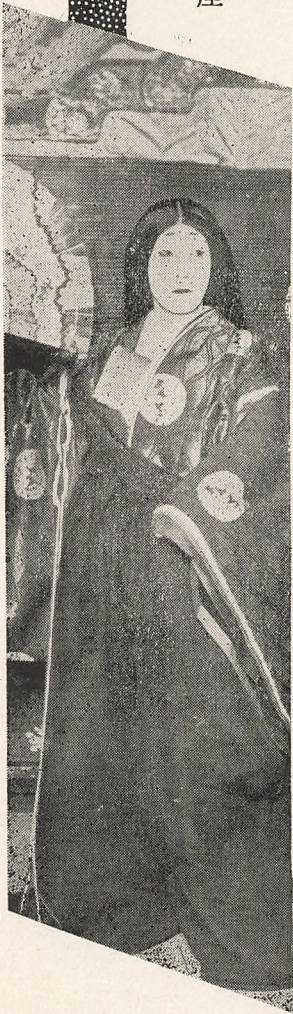


清元
保名



(郎五翁) 名保借安

菊五郎
一座



『春日局』

春日局(海軍)

八日月神戶

松竹劇場

『海』



劇 郎 五



(郎五) 師 漁

(蝶桃) 人 美

「女の味方」の畠山茂吉(五郎)



座 伎 舞 歌

阪大・月八

面 臺 舞

「燒 小 燒 夕」

オール新作をお土産に帰演!

曾我 廻家

五郎劇

五日初日 廿四日 ← 廿日興行

- ☆ 毎夕五時開演 ☆
- ☆ 初日に限り四時開幕 ☆
- ☆ 初日各等割引料金 ☆
- (1) 軍需工場 一場
- (2) 町會の人々 二景
- (3) 海(うみ) 一場
- (4) 夕焼小焼 一場
- (5) 女の味方 二場

前賣切符と団体観劇
 一等指定席券は五日前迄發賣
 二等の樓下までは前日に發賣
 御好部の一席分は毎朝前日に發賣
 發賣は致して語りませ、団体観
 劇は時として便宜に致します
 前賣切符及(76)二八二八番
 專斷電話

初日 櫻三十錢 御櫻五十錢
 日 菊五十錢 觀菊八十錢
 料引 三等七十錢 觀三等一
 金 二等四十錢 料二等三十錢
 一等二十錢 料一等三十
 (他三入場税一割)

り限に券指定席等一 / 中賣發下目

冷房完備 今唯の四谷怪談 大阪 歌舞伎座 二日まで演

清酒

白鶴

白鶴

白鶴酒會名

白鶴酒會名

白鶴酒會名

し願祈を久長運武の士將軍皇
ふ誓を進邁に策國後銚てせ併

座 進 前

山岩森京嶺山原岬	瀬橋山市澤澤嵐澤瀬市嵐嵐助市市坂市中市市山坂中山市市坂	中河申河
	高	原 原
岸田田町 本	川 崎川村村 村川川 屋川川東川村川川崎東村崎川川東	村崎村崎
し富ひみ葛貞緋た	菊小進岩比千芳幸花扇敏秀助笑勝銀進公庭章島み進長菊樂調	翫國鶴長
づ貴ろち 紗か	之三 五呂 三次 之 太一次三三 二の五兵之三	右 右 衛 衛 太 十
江子子代子子子子	亟郎藏郎志郎郎郎章升夫助藏郎郎郎郎司次郎郎衛助郎門	門郎藏郎

し願祈を久長運武の士將軍皇
ふ誓を進邁に策國後銚てせ併

劇 庭 家 竹 松

小元森高	石橋松美千二丸浪石小石月小宮	曾志 曾曾曾曾田曾曾曾曾
		我賀 我我我我 我我我
		廻廻 廻廻廻廻 廻廻廻
織安 田	河 平川種條山花渡泉島丘松村	家家家家家家家村家家田谷
桂 英	郁芳百花照喜千瑛和康松孝松	十 淡 天鐵十文樂八京左通天
一 二	合 代榮	四之久
耶豐郎互	蕪代子子子子子子子子子子子子子子江	吾海 照彌福童太呂助馬天外

！ 作大の秋都京竹松

語物菊殘

總原脚構演 監督本成出
 白村依川溝 井松田口溝
 信梢太郎 太風義郎健
 郎氏賢氏二 撮美術同舞錄
 影證考裝置音 三木食水志
 木村滿谷木 滋莊南浩田
 人氏氏一

載所日毎

— デ ン サ



絢爛豪華な總配役陣

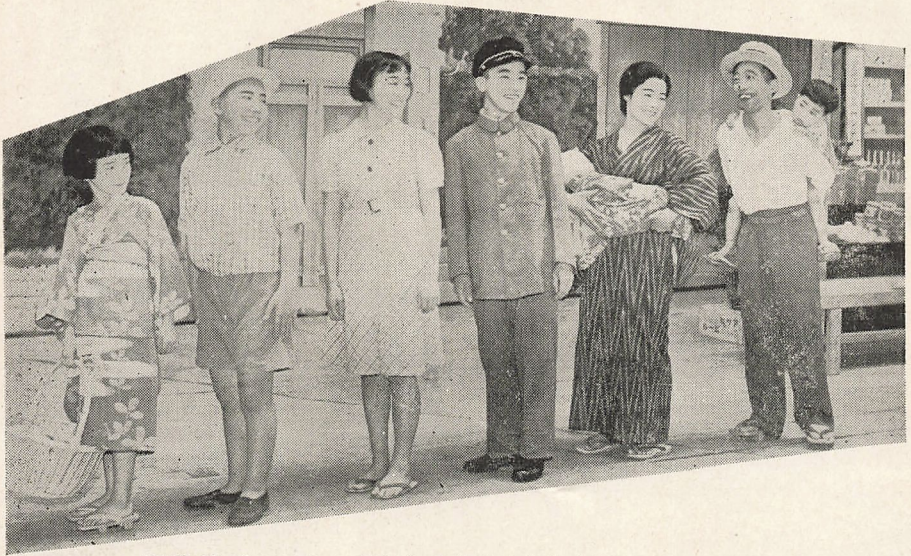
大松竹ブロック總動員の

尾上菊之助 花柳章太郎
 中村福助 高田浩吉
 榮壽太夫 川浪良太郎
 藝妓小仲伏見錦之助
 尾上伯父關松信子
 お徳の伯父 高松之助
 守田勘彌 葉山純之
 太夫元石常吉 石原須磨
 大阪の商人 奈良澤一誠
 尾上多見藏 尾上多見太郎
 寺の住職 玉島愛造
 茶店の婆 中川芳江
 お徳の伯母 岡上米子
 元後の娘おつる 最上菊子
 藝妓榮龍花 岡菊子
 尾上第五郎 河原崎權十郎
 尾上多見三郎 花柳喜章
 待合の女將 柳戸はる子
 按摩元俊志賀廼家辨慶
 お村芝翫嵐徳三郎
 中村芝翫嵐徳三郎
 第五郎女房お里梅村蓉子
 尾上百十郎 磯野秋雄

家
庭
劇



河石 中女 織小 人主の屋百八 「シロブエ」



(子榮千) 子じふ妻 (吾十) 吉茂野石 員社會 「しほ用土の寶」

三十の字の幽霊

怪談



(海淡) 衛兵惣屋勢伊

(外天) 六喜 同

(吾十) 平重 者の旅

大坂初進出 『笑の国王』 中座



生駒雷遊



關時男



松宮照枝



七月の浪花座 「森の石松」 梅澤昇



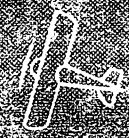
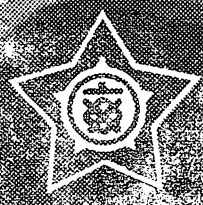
女辯士 (不二洋子) 角座



隠亡堀の場 「いほろ假四名谷怪談」

七月の歌舞伎座

大阪毎日新聞



大阪毎日新聞社の事業

- 大阪毎日新聞
- 東京日日新聞
- 英文「大阪毎日」
- 大毎・小學生新聞
- 東日・小學生新聞
- サンデー毎日
- 點字「大阪毎日」
- エコノミスト
- 寫真特報「大阪毎日」
- 大日本青年
- ホーム・ライフ
- 映画とレビユー
- 新輿論
- 大毎コドモ
- 大阪毎日新聞縮刷版

生動せる社會常識の百科辭典

大時新報

明朗なる實生活の感覺機關

大時新報

京都昌隆新聞

京都の誇る代表紙！

京都人の讀む郷土紙

朝刊八頁・夕刊四頁
一ヶ月 九十五錢

京都日日新聞社

京都府京都市中區丸太町南入大倉町

りた燦價眞のそに下局時

ずがるゆ続傳の年餘十六
る語を用信の大最滋京

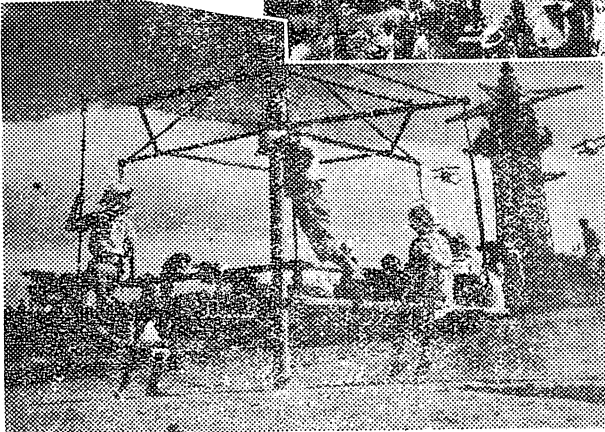
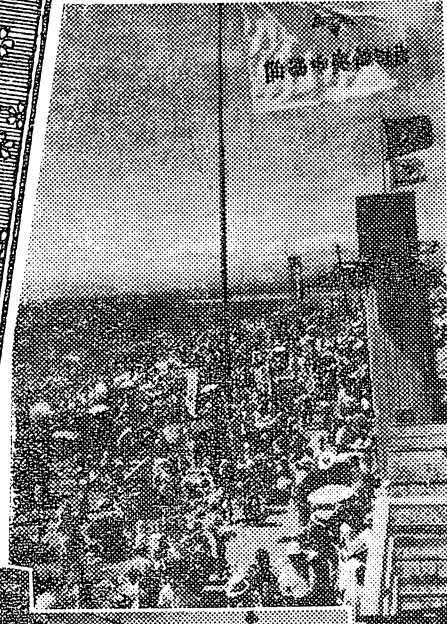


心身鍛錬

△△山に鍛へよ▽▽

〽〽海に鍛へよ〽〽

場浴水海濱大塚^{主本}社^{備社}



季夏 厚生大會 ↑

大阪一の愉快な

明るいつ夕刊新聞

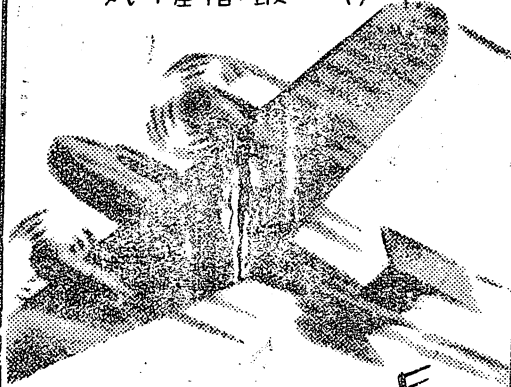
【年中無休】

購讀料

一部金貳錢
一ヶ月金五拾錢

本社主催 生駒山上

威權高最の界業



長期戦だ!! 覚悟はよか

飛躍工業日本の金貌も
詳報する本紙も読み
而して業者の推進力
たらしめよ!!

日刊
工業新聞

本紙十二頁
全工業網

購讀料

一ヶ月 金壹圓廿
六ヶ月 金七

大 阪 北 區 中 區 之 島 五 丁 目
大 阪 大 街 口 替 振
番 四 八 三 六 三
大 東 京 橋 區 銀 座 西 二 丁 目

日本
商業
新聞

夕刊
大阪
新聞

大阪市北区堂島浜通四丁目三番地
東京市麹町区有樂町二丁目四番地

電

組織株式會社
 資本金 貳百萬圓
 創立 明治三十四年七月一日
 取拔高告 年額貳千萬圓以上
 ◎東京大阪 全國各新聞記事 中廣告特約
 ◎特約取引 內 外 五 百 余 社
 ◎新聞雜誌
 ◎社團法人 同盟通信社 之 姉妹會社
 東京本社 日本電報通信社
 名古屋 電通名古屋支社
 上海・天津・北京・電通廣告公司

通

營業種目

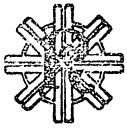
營業部
 ○全國、新聞、雜誌宣傳廣告代理取扱
 ○圖案、文案、意匠、作製
 ○廣告、統計、通信

寫真部
 ○活動寫真の攝影、映寫
 ○各種商業寫真

出版印刷部
 ○新聞紙、新聞廣告、雜誌、研究、日本電報、英文、日本雜誌、英文、貿易、月報、獨逸大觀、伊太利大觀等刊行物の發行
 ○紙型、寫真、凸版、各種製版印刷

企畫部
 ○各種廣告、計劃、立案
 ○各種廣告、宣傳、企劃

(通電 稱略)



大 阪 市 北 區 之 中 島 二 丁 目

大 阪 電 報 通 信 社

電 北 一 一 一 九 九 九 九 五 五
 話 濱 一 六 二 三 四 六 七 八

實益記事滿載！
趣味讀物充溢！



大阪市東區北濱二丁目卅一


電話北濱②
七五五
五二二
五六六
七六六
番番番

錢貳金部一・頁四刊夕



戎橋北詰
阿部野橋南詰
櫻橋交差点南

シズンズ末ル！ キリンビヤホー



補助薬 美神丸

補助薬の補強によつて神丸の薬効が倍増し、使用感よく奏効も一層早くなりました。これ程進歩した所も断然よく効く神丸を今すぐ御服用下さいませ。

大阪市東區南久寶寺町堀筋
本舗 合資 宮内善造堂
振替 大阪五七番

（採布薬添附）
五週分一個半錢
十週分三個半錢

新聞で見た試験
を透れと書いて
ハガキを本舗へ
お出し下さい
美神丸一週分と
婦人衛生寶典と
冊其他送料も頂
かず無代で進呈

美神丸

スセロフ

作製板看術美

るゆらあ

告廣傳宣

社事務告廣

造勝中田

前日千阪大

番〇九七三戎電
ルクナミ

裂小・具道小

裳衣貸

裳衣の禮婚・會藝演温

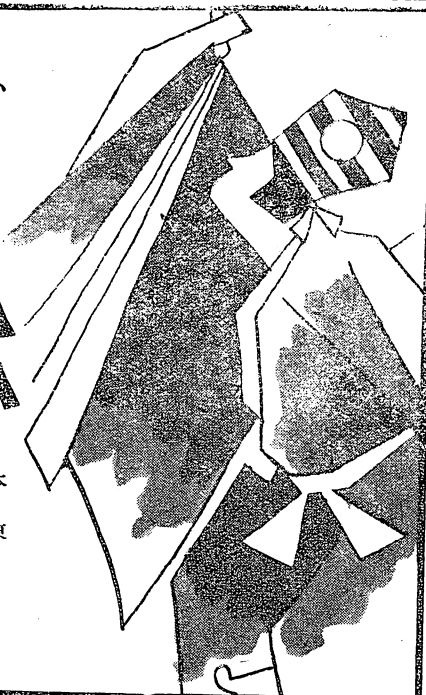
部裳衣竹松

内ルビ竹松町坂南區速浪市阪大
番四三六五戎話電
四ノ二町形駒區草淺市京東
番一六六六草淺話電

店本

店支京東

(いさ下用利御拘不に少多裳衣の般一他其)
(すま計取くよ利便じ應に談相御の客來御)



胸やけに ノルモザン錠



- ノルモザン錠は珪酸アルミニウムを主成分とする今迄にない制酸鎮痛劑で、
- ① たゞれた胃壁を被ふて胃液の刺激を除きます。
 - ② 胃中の餘分の胃酸を吸著し酸度を低下します。
 - ③ 分泌腺を收斂して、疼痛を輕快ならしめます。

【ノルモザン錠の主治効能】

胃酸過多症、胸やけ、嘔氣、溜飲、胃痛、胃潰瘍、きみづ便秘、悪酔、二日酔、胃痙攣、船・車暈に奏効す。

(價格) 10錠、50錠、100錠、1箱

三回、飯前、後、服用
各町の藥店にあり

元賣發 株式會社 田長兵衛商店 大坂市道修町

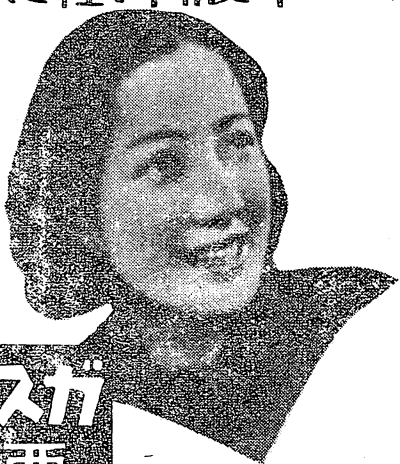
39(2)344

川魚大御料理
野芝菜御料理

柴 藤

野芝菜御料理
柴藤
電話南 九五二
四八四

お茶と軽い御食事



和やかな
まみの茶房

ハスガ
描西

岡本商店



一般宣傳

廣告取扱

大阪住吉区住吉一丁目五八六

金鶏印罐詰 二大製品

1. 純良精選の牛肉

で御座います

1. 不意の御來客に

1. 御酒ビールの御友に

1. キャンピングに

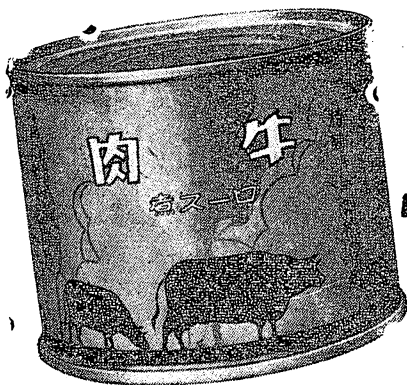
1. ハイキングに

1. 各地百貨店

著名食料品店

に販賣致して居ります

1. キンケイ印を御指定下さい

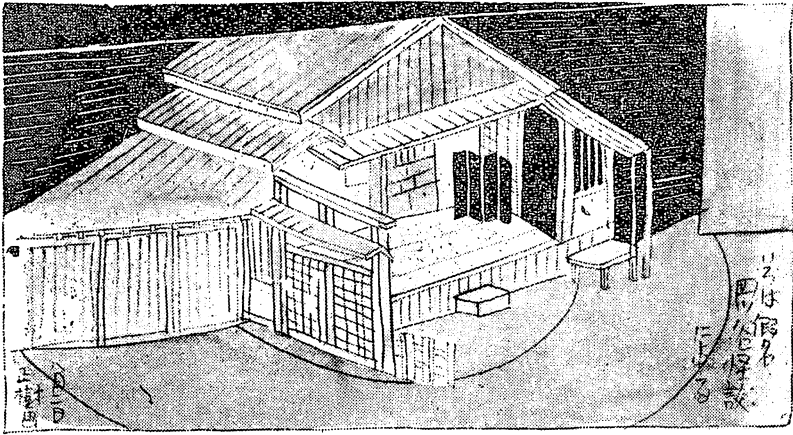


洋酒・食料品・罐詰問屋

大阪市東區豊後町三番地

株式會社

横山商店



◇ 誌 雜 合 綜 畫 映 劇 演 ◇

扉カットは名作舞臺裝置集として本
號から號を追つて、名作の舞臺ス
ケッチを掲載いたします。
本號スケッチは七月歌舞伎座の四谷
怪談——。

號 三 十 五 百 第

輯特公奉後鏡



國策の線に

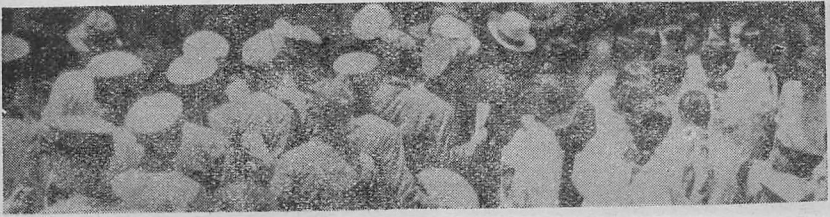
實川延若

御申越の時局美談といふものが生憎と關知しませんので申譯もない事と存じます。

誠に些細な事でお話する程の事ではありませんが、俣延二郎が此程長髪を奇麗さつぱりと丸坊主になりました、その動機とでも申しませうか第一線の皇軍將士の方々の勞苦を偲びまだ適齡には達しません、若いものが髪を長く然かもポマードとかいふものでテカ／＼光らして居る時でもないと感じたか、私に相談もせず去る日出入の散髪屋へ行つて美事に丸坊主となり、歸つての話しに俣ながら國策に沿つた一端と褒めてやりました。この意氣この氣持が何事にもあつてほしいと思ひます。子供に教えられたといふ事もないですが、私も至急を要しない時などは自動車は廢して體位向上を計つてゐます。

愚作一首

〃國策の線に沿ふべし事々に〃



弟とたばこ

嵐 吉三郎

聖戦三年の盛夏を迎へました。

有害無益 たばこです。

私は事變前迄は大へんな喫煙家でバット。チエリー。他を七ツも八ツも吸つた男です。不規律な生活の私等には是は毒だ、また不経済でも有りやめよふくと思つても、どふしてもやめる事の出来なかつた私が、事變起るや實弟が、

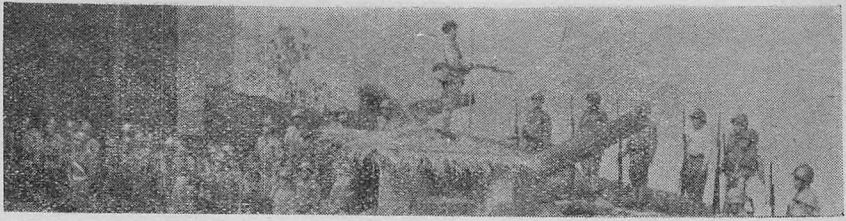
ほまれの出征、うん、こゝだ、やめるのは此時だと決意し今ではやめて丸三年體位向上とも成り、是も弟のおかげとよるこんで居ります、只今では門人達にも自發的に去る七月七日の紀念日を機會にたばこをやめ、なにがしの金を貯金致して居ります。

半島の同胞

市川段猿

この間、北支に轉戦二ヶ年の勇士が歸還したその勇士の話によると、歸還兵士を乗せた列車

が朝鮮を通過する時だつた、平壤から釜山までのあの長い鐵道の間、どんな小さい驛でも、ど



んな夜中でも半島同胞は迎へてくれたそうです。中にも半島の老人達はその勇士の手をとつて拜がまんばかりにして號泣感謝してゐたそうです、ところがどうです、釜山から聯絡船に乗り下關に上陸、下關から大阪までの鐵道沿線でその勇士たちを迎えてくれたのは僅か二三の驛

ラヂオ体操

だつたそうです、と、その勇士は語つて尙言葉をつゞけて、自分たちは歸つて來た者だから迎えてくれなくても結構です、しかしこれから行く兵隊さんは、出來る限り皆さんで歡送してあげて下さい、と北文に轉戦すること二ヶ年の擧の勇士はそういつた。

淺尾 奥山

國策の一般を實行致して居ると思ひますが、書き立てゝお話も申されませんが、私は午前五時半起床、ラヂオ体操に行きます、近隣の美談でもありませんが、六時のラヂオ体操がラヂオ商店にかゝります、それは色街の事です、早朝の自發的のラヂオ体操は出來ぬ事とあなどつて私は居りましたが、老若少女四、五十人東を向いて列んで一二三四と手をのびし、足を上下に、首を左右に振つて体操を致して居りますのには、實に驚きました、それが昨年よりも一

層今日のラヂオ体操を色街の眞中に行れて居ります事は、やはり時局を認識しての事でせう、私は毎朝六時半朝刊を見て皇軍勇士の花々しき御奮闘並びに御戦死の記事を拜見致します度事に胸に感謝の念が湧き立ち、口にしようみようを祈り、頭が自然と下り黙禮致します。私は大正二年兵です。第二乙種で未教育なので非常に残念で堪りません、然し時局日本國民として健康を第一として非常時局下萬分の一でも御國の爲に御奉公を致したいとハリキツて居ります。



銃後のつとめ

市川九團次

申すまでもありません、戦場の勇士のことを思へば私等はただ、藝術に心を入れて一心不亂に舞臺で大いにベストをつくし働いてゐます樂に入る前は近所の出征軍人の見送りや歸還勇

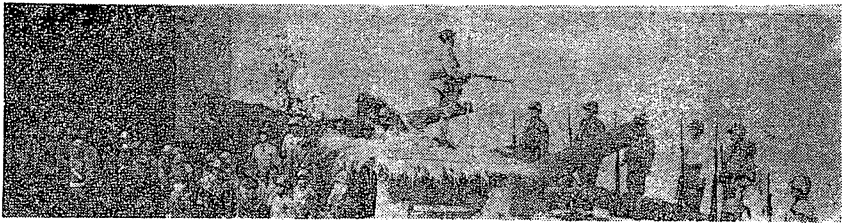
士の出迎、或は護國の花と散られた勇士の遺骨に、かかさず出迎へます、せめての銃後の務めだと思つてゐます。

國策通帳

實川八百藏

私の友人にKと云ふ吞兵衛がゐます。去る月は突然美事な長髪をクリ／＼坊主に刈り込んでしまつたのです。そして彼の曰く「恚うやかましく國策々々と耳を叩かれては、如何に吞兵衛ののんき者でも、何か一つ位政府の御意に添わねば日本人らしくない感じがする」とて貯金を始めたのです。

貯金は、なし易い様でなし難いもの、なし難い様でなし易いものです。その方法も、「つもり貯金」「天引貯金」「五錢玉貯金」「端錢貯金」等々種々な方法もありますが、彼の始めたのはスタンブ貯金でした。それは、巡業先地の二等郵便局へ五拾錢宛貯金して、其の土地の地名局名入りの日附印を蒐集するを楽しみに始めたの



です。巡業のない時は大都會での興業に決つてゐます。大都會なれば二等局の數も多く又それだけの樂しみがある譯です。延いては三等局にも及ぼそうと云ふので、今や彼の貯金通帳は、假通帳から離れて本通帳になり、その日附印も近畿は無論の事、九州、四國、東海道、朝鮮、臺灣の各地にまで及んで、時局にふさわしき面

戦線の友

市川玉太郎

白い企てに深く感じました。で、私も、先般Kに見習ひ、遅れ走せ乍ら自分で「國策通帳」と名付けた貯金通帳が一冊、私の机の抽出しに増へました。今に、ウンと貯金が出来たならば、それを引出してKと朗らかに祝杯を擧げやうと思ひます。祝杯を擧げたつもりで又別な日附印を増しませう。

國民精神總動員の御主旨に添ふべく私達もお芝居の休みを利用して皇軍の武運長久祈願の参拜や體位向上をはかつてのハイキングとおよばず乍ら銃後につくす様致して居ます、私が戦地に活躍して居られる皇軍勇士から勉強して一日も早く一人前の俳優に成つて下さいと激励の手紙を頂いてほんとうに感激致しました、お話の勇士は私の友達で矢張り歌舞伎の人で片岡秀郎さんのお弟子さん西宮市出身の片岡國太郎さん

事豊川治次君私とは芝居に居られる頃から仲よく親しくして居りました處、丁度昨年七月晴れの應召を受け勇躍第一戦に行かれる事になり、豊川君は云ふに及ばず我々友達も大いに祝し立派に働いて來ますと目出度出發されました、ほんとうにうらやましき次第です、戦地よりヒマを見て手紙をよくくれます、私も自分のプロマイドを送つたり文通致して居りました、最近來た手紙「其後は如何です豊川もガン張つて居ま



す南支は只今酷熱地獄です、百廿度突破して全く口には申されぬ暑さです。晝は蠅軍の空襲夜は蚊軍の來襲全く閉口します。支那軍には恐れぬ勇士も蠅蚊は苦手です。貴君は益々元氣でどうか一生懸命勉強して一日も早くえらく成つて下さい。自分は戦地に有つても貴君の事を思つてゐる。どうか勉強して下さい自分と二人分の勉強して下さい。自分も戦地で君と二人分の働きをします」と勵ましてくれます、戦地に居る友を慰め勵ますべきは私の私が返つて戦地の友

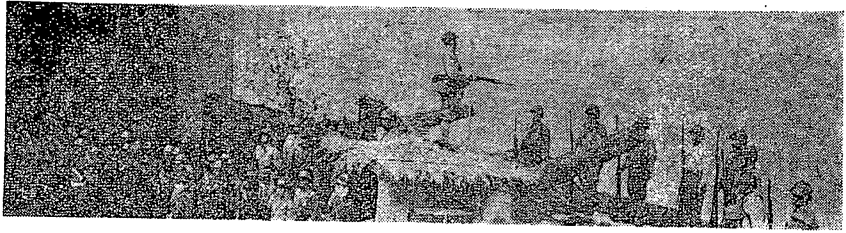
徒歩と貯金箱

中村芳子

聖戰第三ヶ年、とかく華美な生活をしてゐると思はれてゐる私達はます／＼自肅しなければならぬ時です、毎日ラヂオ新聞に報道されてゐる戦線の勇士のみなさまの事を思へば勿體なくて贅澤な事は云つておられませんが、又無駄な物も買はれません、お芝居へ行くのと神様へお

から勵まされる、こんな感動した事は有りません。お國の爲に働いて居る友があつて暑い／＼南支に有つて私の事を戦下の間にも心に掛けてくれる事の嬉しさ、此の友の爲にも二人分の勉強して銃後を守りつゝ舞臺を戰場として大いにガシ張り、友の激勵にそむかぬ様早くゑらくなつてと感激の餘り口にさへ出してちかいました。戦地の友から勵まされの手紙を頂き感激致しましたお話です。終りに皇軍勇士の武運長久を祈り並に豊川治次君の長久を祈りつゝ。

参りするのはバスか電車に此頃は決めてゐます劇場から家迄は割合に近く歩くのには丁度好い道程なので、時間のある限り歩いて樂屋入します、大へん運動になつて好いと思つてゐます。それから最近にやり出したのですが、つもり貯金と云ふのをやつてゐます、買ったつもりで貯



金箱へ入れて置くと言ふ風に……なか／＼それが入れられない方ですが、ほんの少しづつでもためてみたら案外大きくなるかも知れません、

舞臺裏から

人にわからない自分だけの贅澤は此際斷然止め様と何からでも思ひつひたまゝに今實行最中です。

石 河 薫

舞臺から、引込みました一瞬、額から袴元から、流れる汗……お、暑い！と思はず口に出やうとしました一言を、私は嘸みころして、汗を押へるのです。それは暑いと思うと、同時に戦線に頑敵と、戦はれて居られます兵隊さんの事が、頭に浮び出るからです。泥濘、膝を浚する道なき道にトラツクを押し行くあの姿、草陰に匍うて、第一線の將士に、彈丸や食料を運び行く姿……水中に橋の桁ともなつて橋を支へらるゝ姿、等々の數限りなき御苦勞のお姿を寫真に見うけました私は、胸に痛さを感じました。それを思へば、わが職務の勞苦は、物の數でないと思はれて、戦場の兵隊さんを思は……

と、我れと我が辛さは消され行くのです、同時に國策の線に沿うてと思ひまして、金製品は、賣り拂ひ、着物の新調は致しません。が、心苦しく思はれますのは、此れ迄の着物は、稼業柄派手な物を選んで居りますので、此の際、有る物を間に合はせて着るには、氣が咎められますが、新調するよりは……と、心を引緊めて居ります、そして、出來得る限り自動車に乗るも見合はせて、バスとか電車に乗るやうに致して居ります。

わづかだに國策に添ひ我れと我が

銃後を守るころ嬉しも



日の丸の小旗

曾我廼家五郎

「矢つ張り日本人ですなあ……」と、意味深い言葉を冒頭に、其刹那に目撃して來た知人が演舞場の樂屋を訪れて語り聞かせて呉れました

昭和十四年七月十四日、澎湃たる援蔣英國排撃の輿論に沸騰した東京市民は、日比谷へくと、吸ひ寄せられるやうに集り、愛國の熱火は遂ひに燃え盛つて、市民二十萬の大示威行進となり、麴町青葉通りの英國大使館ヘドツと津波の如く押し寄せました。それを守るは警視廳選り抜きの警官約百名、館前の濠端に面した木立には騎馬巡查三十名、聲を漚らして制するが、興奮した市民は聞かばこそ、小競合ひの數十分間が過ぎた頃、誰れが投げ込んだか、日の丸の小旗や、敵性英國を撃て……と大書した吹き流しの幟が、大使館の門内へばらくと落ち込むと、何處に潜んでゐたのか、館員の英國人が、さつと現れて其小旗や幟を拾ひ取らうとする、

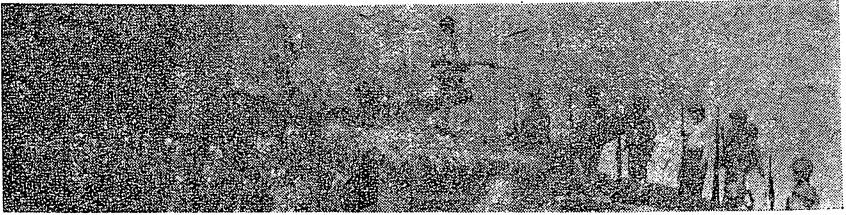
これを見た市民は、わつと喚聲を揚げて、「日の丸を渡すな、取り戻せ……」と、騒ぎ立てるが、大使館の鐵の門はびたりと閉されてゐるので、どう仕様もない。

此時、館内から脱兎の如き勢で現れて來たのは、英大使館に雇はれてゐる三人の日本人、館内へ逃げ込まうとする館員を突き倒して、素早く小旗幟を奪ひ返へして、さつと門外へ投げ返へしました。

怒濤の如き歡聲、嵐にも似た拍手……。

緊迫した事情の下にある兩國の關係、にも係らず、日本人でありながら英國の祿を食んでゐる肩身の狭さ……それが日の丸の小旗を見て、祖國愛の熱情が迸つたものでせう……？

「矢つ張り日本人ですなあ……」
と、聞く私も、斯ふ云ふより他に言葉がありませんでした。



洗濯献金

曾我廻家小次郎

七月七日の記念日以来、好きな酒を節し、煙草も量を減らしてゐます……が、まだ禁酒禁煙とまではゆきません。然し、長期建設の國策に副ふ可く努力はして居ります。

人一倍汗かきの私は、夏の徒歩が殊に困難なので、よく圓タクにりましたが、今年はまだ一度も乗りません。

東京出演の度毎、十五年來私の定宿にしてゐる木挽町せき旅館での出来事です。

私がいづもの通り、よごれ物を洗濯屋へやつて呉れと、女中に頼みますと、いつも飄々な女中が眞面目な顔で、

「ク濟みませんが、私に洗はして戴けないでせうか……洗濯屋ほど綺麗には洗へませんが、其換りお安く致しますから」と云ふのです。

ハハーン、夏場は泊客が尠いので、洗濯の内職をするのかな……

と思ひましたので、笑ひながら、さう云ひますと、女中は一層謹嚴な顔をして、
「いゝえ其洗濯代は、全部國防献金にするんです」
と云はれた時は、自分の淺間しい推量が耻かしくなりました。

<p>ビステキ専門店</p>	<p>湊町スミヨ</p>	<p>三階 宴會場新設</p> <p>湊町北詰阪急ビル 電樓川四七九三番</p>
----------------	--------------	----------------------------------------------



面臺舞 嫁花のソロブエ

國策を作る芝居

山上貞一

作家がその作品の上に良心的な仕事をする——それが藝術的とのみ言へない時代が来た。大臣は——作家たりとも進んで國策決定に參與せよ——と提案してゐる時、文學は閑文字の羅列で男子一代の仕事で無いと筆を投げる事はいらなくなつた。

だから、私が最大國策劇を書いた譯ではないが、座付作者の仕事が單に營利會社の興行價値を高める爲ばかりの仕事でなく、所屬俳優の長所摘出ばかりが能でなく、時には國家的に、一國民として良心的な仕事をする事もあることを認識して貰ひたい。

三年目に一篇ぐらゐる芝居を書いて劇

作家だとは言へない——と川村花菱氏は書いてゐられるが、御最もなことが、數でそれ以上書いたものが脚光を浴びるのは、形式に各様こそあれ、まづ座付作者が多いことゝなる。

その座付作者だからつて——書かねばめしにならないものばかり書いてゐる譯でもなく、何かと考慮し苦悶し練磨し發見しやうと努力してゐる。それは藝術的とばかり言へないかも知れないが、凡そ、藝術的といふ觀點をどの角度から見ても定めるべきかを明言出来る人はまづ無い筈だ。嗜好的に、趣味的に各様に肯定するといふ事は出来るだらう。それは各個人の小さい好みに

過ぎない。その好みに適合しないから非藝術だとは言へない。

主観的に良心的であり、客観的に藝術的であれば頂上だと思ふ。態度には使へる言葉だが自稱して構えるものでなく、これは評者の言と見るべきだろうが、蓋しそれに一任すべきものでもなさそうだ。

書いたものが、あれは何を書いたのですと説明すべきではないだらうが、芝居の場合は作家の持つものがそのまま、舞臺に出てゐるとは言へない。その點は活字になつた小説にはその危険がない。

校正さえ誤らなかつたら、作家の全能力はそのまま、讀者に甘受される。それでさえ、讀者の持つ先入觀念に左右される。

劇作の場合は、觀客が享けてくれるまでには、随分と故障が這入つてゐる。援助されてゐると言ひたい。綜合的によりよく効果が擴大されてゐると

言ひたい處だが、まづ舞臺の場合は故障があると申すべきだらう。

そんな故障のあるものを金を取つて觀せるべきか——そこに作家の良心は大きく働く。

めい、の爲に書いてゐない何かのはつきりしなければ作家の面目にかゝる。

昨日までの作家は藝術的良心といふ逃避行があつた。——それも少數のうるさき人々に對して——。

今日の作家には國民的良心といふ目的がある。逃避では無く、進展だ。

國策に副ふ作品より、國策を作る作品を書くべき秋に作家は直面してゐる。私はその意味で筆を確く握りしめてゐる。(十四年八月)

x
x
x

x
x

繁華街に近く、交通至便

閑雅な和洋室！

◎モダン階上浴室新設◎

南地ホテル

一宿 一 半
二圓 額半 南地戎橋電停前
三圓 電話南四一四・四四一

天婦羅と

佛蘭西料理

喜久屋食堂

道頓堀 南 75-1-73
式橋北詰 748番

涼
紬
水
を
一
行
く
芝
居
國



秋を背景にした舞踊劇

渥美清太郎

皆さんは、「市原野」といふ狂言を御存じでせうか。今昔物語にある傳説を其まゝ樂劇化したやうなもので、市原野の茂る尾花の中に、平井保昌（歌舞伎では頼光が本當なのです）が笛を吹きながら立つてゐる。そこへ袴垂保輔が白刃を抜いて忍び寄る。保昌に敵せず一旦隠れると、牛の

皮をかむつた鬼童丸（書き卸しはお姫様）が出て、ちよつと立廻りになる。所へ本鐵砲の音がして、短銃片手に保輔が現はれ、三人がだんまりといふ芝居であります。「馬鹿々々しい。この時代に鐵砲があつて堪るものか」と罵倒する人もあり、「およそこんな不完全なドラマツルギーがあ

るか」と詰め寄る人もあり、立派な新聞の背景を持つ堂々たる劇評家まで、こんな愚劇はないときき下ろしてゐます併し私は、秋を背景にした芝居では、捨てがたい舞踊の劇と思つてゐます。

今は、丸本物ですら、正面から理屈責めに見て批評する世の中で、脚本と役者と音楽とが一緒になつて、醸し出す「味」なんぞ鑑賞してくれる人は少ない。がマア、丸本物などには、音楽といふお手本があるだけに、解つてくれる人はいくらかあります。ところが、舞踊劇などになるが最後、批評といつたら西洋舞踊のテクニクをとつこにとつたやうなものばかりで、味を見られる人などは皆無です。市原野が散々な目にあはされてゐるのも無理はありません。劇評家は殊に踊りませんから。

併し、市原野は、秋を背景にした芝居の中では、有數なものだと思ひます。廣漠たる市原野の秋草と、咬々たる明月、そこに音楽が聞えるだけでも値打があるべきです。歌舞伎の武人を代表したやうな保昌と、大盗の見本のやうなグロな拵への保輔と、美しい姫或ひは稚兒妾の交錯。笛と白双と牛の皮、笛の音、雁の聲、鐵砲の音、常磐津の聲調

だんまり下座音楽の鳴物の。私は、これだけでモウ満足します。いゝ心持になる事が出来ます。舞踊劇は、繪畫美、動作美、音楽美が一致さへすれば、それで充分です。理屈は要りません。むしろナンセンスなほど美しさが増します。

舞踊劇には、秋を世界にしてなかく、いゝ物があるやうです。で例の「紅葉狩」の如き、傑作だと思ひますが、あれで維茂の活歴史が除かれたら、もつと我々を夢路に誘つてくれるでせう。昔の維茂は羽織着流しに限つたものです。理屈が祟つて「葛の葉」信田の森など、近頃さつぱり出ませんが、あれも面白く出来てゐる舞踊劇です。「仲國」なども、材料はそのまゝ詩でありながら、扱ひ方が悪い爲に芝居を見てはお琴の「小督」を聴くほどの味もありません。それから考へると、同じく謡曲から借りながら、古い長唄で踊る「菊慈童」などの方が、ズウツと旨味があります。歌舞伎を、たゞ観るのでなく、味はつてくれる人が、もつと欲しいものです。

× × ×



淺茅ヶ宿其他

額田 六 福

綺堂作品の「秋の舞臺」について書けとの命令である。實は先生の作品の全部について、分類問題を企てゝゐるのであるが、まだその緒についたと云ふ丈で、完成するまでには相當の時間がかかる。今日は只、思ひ出すまゝに書きつける。

先づ修禪寺物語の第二場、虎溪橋の場を思ひ出す。盆の休みのあとだから、曆では秋である。河原の草叢に虫がしきりに鳴いて、頼家と桂とが、話しながら出て來る處は、正に一幅の名畫であらう。

箕輪の心中の大詰も盆あけである。草屋の庭に不似合に大きい池があつて、それに蓮の花が一杯咲いてゐる。亡くなつた源之助が、その花をむしつて、座敷へ蒔く風情があり、と思出される。

新朝顔日記、これも約束通り秋である。宿屋では特に秋を感じさせるものはないが、大詰の大井川の場合は、情味滲々。この熊澤の臺詞は修禪寺の夜叉王についての名臺詞である。澤正もやつて、世評にはならなかつたが彼の傑作の一つと私丈は信じてゐる。如何にも名調子だつた。

○ 淺茅ヶ宿は、宗十郎で初演された。蓋し、代表的の秋の舞臺であらう。目をつぶると、薄に交る一もの白桔梗の姿が判然と思ひ浮べられる。

室町御所の大詰、淀川堤も、それにつぐ。雨夜の曲には戀に狂うた若き公卿の姿が思ひ出に残る。

清正の娘と、勾當の内侍とは、共に歌右衛門の傑作として残るもの。前者は筑後川原の櫛の美しさと、後者は、湖

畔の高燈籠と、湖上に映る月影と、先生得意の場面だ。兩國の秋は、舞臺装置に秋の情緒は豊い、それを補ふ臺詞の妙、追従する者は尠からう。

まだ上演されないが、ラヂオで放送された足柄山の月は眞正月から秋と取組んだ作だ。私も少しばかりお手傳したが、時局柄、ことしの明月頃上演を見たいものだと思ふ。



舞 台 の 月

西 尾 福 三 郎

第一場が大井川の秋の舟遊山二場が、堀川の義光の館、第三場が足柄山で、目踏はるかに不二の裾野を望みながら、明月の下に、一本の松の下に秘曲を傳ふる。これ以上、秋の情緒を一杯に盛つた舞臺はあるまい。正に生きた繪であると思ふ。敢て自家廣告をしておく。

季節の移り變りを最も敏感に表現した藝術として俳句と歌舞伎劇を擧げる事ができる。俳句にあつては季節が全俳句の生命のやうに云はれてゐるが、歌舞伎にあつてはそれ程重要ではない迄も、一つの舞臺に季節があるとないとでは魅力が大部違つてくる。春夏秋冬の季節の中でも特に雪月花と云つてこの三つは舞臺上の雰圍氣を造り出す最大の

要素である。

殊に所作事を二つ以上並べて演ずる場合には必ず雪月花とこの三つの主題を適宜に按配して上演する事が習慣になつてゐる。

時代物の舞臺にも世話物の舞臺にも色々の月が出てくるが、就中月を取扱つて尤も普遍化してゐるのは舞踊物の世

果であらう。へ月は一つ影は二つと云へば汐波の事でありへ水に寫りし月影はと云へば戻橋である事を大いの人知つてゐる。玉兔のやうに舞臺全體が月世界であり乍ら一向月を意識させぬものもあるかと思へば、又汐波のやうに月の片影も舞臺へ持出さずに、それでゐてはつきりと月を意識させる所作事もある。舞臺へ直接月の形を顯はすと顯はさぬに拘らず舞踊劇に扱はれた月は、季節感乃至風物感的な月ではなく主として情緒感の上で月を取扱つてゐるのである。

これに反して普通の劇、それも主として世話物の舞臺にあつては、月はあるのまゝの姿で夏から秋への季節の王者として寫實的に取扱はれてゐる。

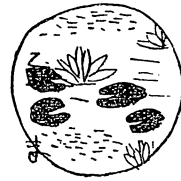
その中の尤も効果的な一場面として「双蝶々曲輪日記」の引窓の段を擧げる事が出来る。

舞臺は月の名所八幡の里、時は新秋明月の待宵、そして冒頭へ出で入るや、月弓の八幡山崎南與兵衛と云ふ床の文句で幕が開くのである。古びた薬屋の居間と中二階、そして屋根に設けられた引窓があつて、この引窓からさし込む月の光りが劇の進行を劃するやうに一齣々々の重大な瞬間を形造つて次へくと事件を移り變らせて行くのである。

文樂で上演する時には月の切り出しを用ひて出したり消したり人形劇らしい稚拙な技巧を見せるが、歌舞伎の舞臺では月の形は顯はさずに専ら引窓の開閉だけで月の有無を暗示させてゐる。月そのものが重要な契機になつてゐる劇であり乍ら、月の形を直接舞臺面へ持出さず、そして光りと闇を劃る天井の引窓を開閉する事だけでマザ／＼と爽やかな月光を想像させる所全く心憎い技巧であると云ひたい。だからこの意味で引窓の一篇は人形よりも歌舞伎の舞臺で見たい芝居である。これと趣は違ふが伊勢物語春日野の場は月を直接背景にしてゐないが、何となく月を連想せずには考へられない名舞臺である。

石碑の立つた春日野の秋景色、色とりどりの萩や桔梗の咲き亂れた野中の佗住居に美少年と美少女の殉情物語を秘めたまゝ、老嫗が夜すがら叩く碁の音と琴の音が交錯して垣間洩れる所、こゝには必ず和やかに冴えた月の光りがなくては完璧な情景とは中されぬ。小由と信夫を隔てる衝立に微かな月の形が描かれてあるだけでもよい。豆四郎の可憐な亡骸に又有常の秘した、双陣の涙に、そつとさし込む白々として月の光りに無限の味はひを感ずるのである。この場面は歌舞伎よりも人形劇に恰はしい。

尊王 俠客 加島屋燕石



篠山吟葉

間一髪の危機において、燕石は辛くも高杉晋作を遁がれさせた。

道は普通なら善通寺から多度津に出でて、そこから中國に渡るべきが順路であるが、途中が危い。そこで燕石は門人の古市麥舟に命じて、伊豫の川之江まで道案内をさせた。

(この麥舟といふ人は通稱藤兵衛といつて、和歌俳句をよくした人である。明治三十七年九月廿四日、七十三で歿した。)

高杉晋作は備後の紅屋喜助と稱して妾のおうのに三味線を弾かせ、下僕民藏を従へて紅賣に妾をやつして金毘羅に來てゐたのである。前年(元治元年)最初の長州征伐から

逃れて、轉々各地に亡命してゐた晋作は、伊豫の消後から今年の四月、燕石を頼つて此地に來たのであつた。

燕石の莫逆の友に美田君田があつた。君田は隣國阿波の人で、尊王の志篤く、僧侶から還俗して燕石と肝膽相照した仲である。君田は近くの金山寺町で寺子屋をやつてゐた。

晋作の一行を迎へた燕石は、君田の隣家に空家のあつたを幸に、そこに晋作を住はせた。共に一意尊王討幕を期す三人が、慷慨悲憤に短夜を語り明かした事も屢々であつたであらう。

その中に幕府は又も二度目の長州征伐を企てた。高杉其他勤王の士の追求はいよ／＼厳しくなる。高松藩は水戸の別れで徳川の親藩である。況んや金毘羅の地は去年から高松の預り地となつてゐる。高杉の潜むを何時までも知らずにある筈がない。いよ／＼閏五月四日に捕方が向ふ事となつた。

逸早くそれを耳にした燕石は、麥舟に危機一髪の間首尾よく高杉一行を逃れさせたのであつた。

一行四人(晋作、おうの、民藏、麥舟)は金毘羅歸りの妾に裝うて、五月四日の朝未起、鞆橋のほとりて燕石等と訣れて、裏山越えに道を西南に取り、財田上村から豊濱の海岸づたひに伊豫の川之江に出たのである。土地ツ子の麥

舟が先に立つて、金毘羅歸りの四人である。途中誰一人あやしむ者も無く、高杉等は安々と川之江から中國に渡つた。

さて憐うして高杉一行を落のびさせた燕石は、これまで幾多の志士を匿つたは勿論、多年に亘る大義の唱道が、到底遁るゝ事の出来ぬを識つて、長男道之助、妾お松其他重なる乾兒達に後事を言遺し、内町の「よし吉」で一同と別れの酒宴をしてゐる處へ捕方が來たので、君田と共に從容として縛に就いた。

それから明治元年まで、足かけ四年間高松の獄に投ぜられたが、獄中に於いて「皇國千字文」「捫蠱餘話」等の著書があつた。

維新の大業成つて明治元年（改元は九月）正月二十日、其日は雨で、丸龜、多度津藩が高松を征討の土佐藩の先鋒となつて雨中に入城した日である。其日漸くにして燕石、君田等は獄を出たのである。

始めて四年目に、日本晴れの赫々たる天日を仰いだ燕石は獄中の疲れを憩ふ暇もなく、二月三日金毘羅を立つて三月三日京都に着、至誠茲に通じて忝けなくも天杯を賜ふ光榮に浴した。

六月、大總督仁和寺宮に從うて日誌方となり北征の途に上る。さうして八月二十五日、越後柏崎の陣中に病歿、時に年五十二。大總督の官より大櫻定居彦の諡號を賜ひ、柏

崎の陸軍招魂場に其墓がある。

明治三十六年十一月三日、天長節の佳辰に特旨を以て從四位を賜ひ、同じく君田に正五位を賜はつた。

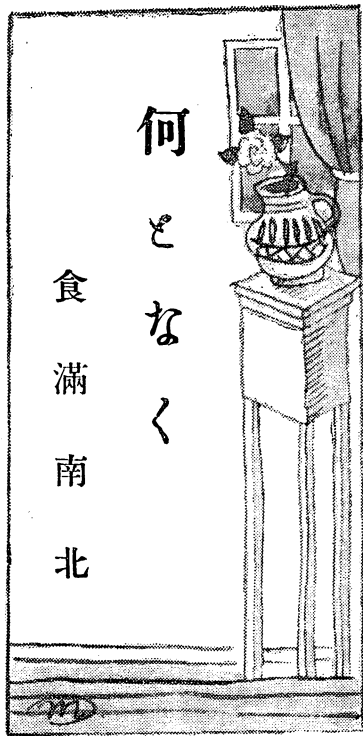
燕石の生涯を通じては劇的にも書くべき場面が多々ある高杉晋作を逸がした件など花々しい其一節であるが、四年後即ち出獄して上京し、天杯を戴いて木戸準一郎、井上聞多、伊藤俊輔等の人々と交り、前年馬關で酒の爲に歿した高杉の墓に詣で、墓前で梅處尼（おうの）に邂逅する件なども充分書けると思ふ。

其他、勤王の志士としても博徒の親分としても、チャンバラの派手々々しい大立廻りこそ無いが、其時代の周圍を背景にすれば、可成りの作品も出來やうと思ふ。

郷田憲氏は或る俳優を目標に時間、場割等大よそのプランを持つて、この程琴平の地に赴き、大西一外、草薙金四郎其他の諸氏に就て猶一層の研究を重ね、いよ／＼來月あたり上演の豫定であるといふ。

下加茂では好太郎を中心に、これは颯爽として若き燕石を描くべく撮影の企劃成つたといふ、其他會我廻家の喜劇化に、東寶の映畫化に、續々として燕石劇化が相次いで現はれる。

この秋は、さながら尊王俠客日柳燕石で持切りの觀であらう。（完）



何となく

食満南北

暑いので何にも出来ないと言ひながら可なりいろ／＼の事をやつて来た。私は私の補筆した四谷怪談が出てゐるの歌舞伎座で連中をやつた、あつまつて下さつた方は二百に及んだ、暑い時にかく多数の御観客を迎かへ私は感謝してゐる。山上貞一君が折柄見えられて私の脊をボンと叩いて、

「いくら分が這入りますか」

と私は思はず、山上君を見かへつた。私は私の色紙まで二百枚も描いてお土産に差上げてゐるのである。暑い頃、私はこんな心持で連中をしたの分はない。

△
 處は大鐵で展覽會をやつた時、S氏とK氏が見えて千とせへ行かうと云ふ事になつて表へ出で、丁度車がゐたので、

「千とせまで」

と云ふと運轉手君見かへつて、

「二町程です、おあるきになつては……」
 思はず三人顔を見合はした。

△
 河内の史蹟を探つてよい脚本のタネをと電車に乗り、乗合にゆられ、山を歩行いた、おかげで面白いものを獲た、他日發表の機會があらうと思ふ。

残菊物語の衣裳の考案や、大阪辯をなほしたりした。それが爲シナリオを讀んで思はず泣かされた、菊の助君の昔の面影が眼にうかんで來た、しかし其の一件は原作者の思ひちがひだつたらうと思ふ。

▽

私は或人から吉右衛門の大藏卿を描いてくれいと頼まれた、私はしつてゐなければならぬ筈だが、見たことがない、烏帽子だつたのか、冠だつたのか、どんなこしらへをしてゐたのか、かいてもく解らなかつて想像で描いてしまつた。あとで寫真を見るとマア、餅とアモ位の違ひだつたので安心した。

▽

私が六代目の土蜘蛛の引込みを描いたら、
『あなたは土蜘蛛をやつたことがありますか』
私はびつくりしたよく見なほすと成程顔といひ、こなしといひ私をつくりだつた。繪といふものは描く當人に

よく似るものだ、かつて曾呂利新左衛門といふ落語家があつた中々達者に繪を描いたが、描く人物も、描く動物も皆曾呂利新左衛門自身の顔であつた。

▽

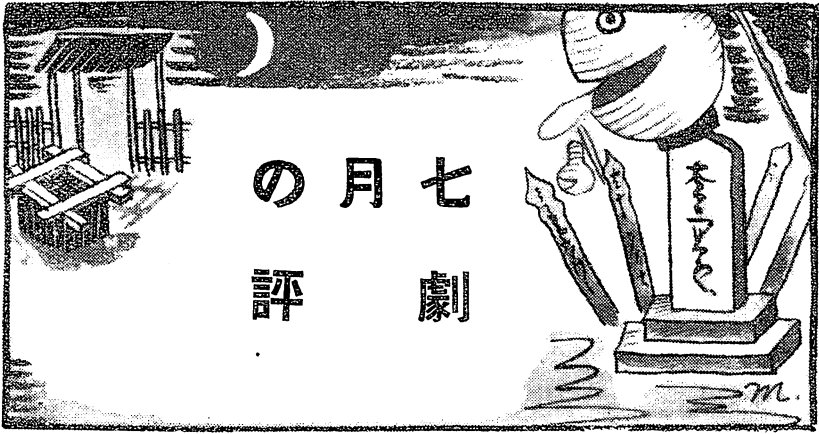
丑といふ妓がゐた。甲丈と親交のある間は丑の踊は甲丈に似てゐた、乙丈と親交のあつい日はその踊の舞臺が乙丈ソツクリだつた、恐らくはたしますしてさうなるのであらう。

▽

徹夜をするのには夏はつらい、あけつばなせば風は通るが虫や蚊が多い。閉めてしまふと總身が汗だ、私の家にはセンプーキといふものがない。

▽

たゞ四時近くになるともう東があかるくなる、これが何よりである、この稿も亦、汗みづくになつて東の白むのをましかねた一夜の出來ごとである。



七月の劇評

「四谷怪談」と「辨慶上使」

— 七月の大阪歌舞伎座 —

菱田正男

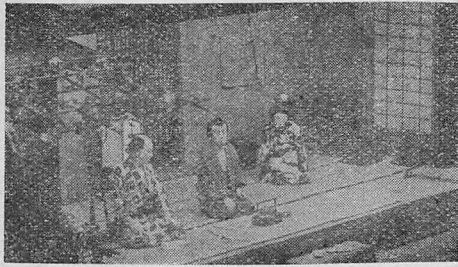
七月の大阪歌舞伎座は延若、魁車、壽三郎、扇雀、芳子らに、東京から宗十郎が加はるゝ大歌舞伎銷夏興行で、珍らしく鶴屋南北の「いろは假名四谷怪談」の通しと、「御所櫻堀川夜討」辨慶上使の段を上演した、陰惨、卑猥、怪奇なこの狂言が當今の時節に上演されたのは珍しい。

關西での「四谷怪談」の最近は昭和十年七月道頓堀浪花座で、故右團治、吉三郎、霞仙、秀郎、成太郎らの一座

で「朝顔日記」「草摺引」「小猿七之助」「權三と助十」などと一緒に上演され、たきりである、その時は伊右衛門浪宅（髮梳き場）隠亡堀、蛇山の庵室の三幕で、右團次が女房お岩、小佛小平、佐藤與茂七、お岩の亡霊、小平の亡霊の五役を勤め、霞仙が宅悦、吉三郎の伊右衛門、秀郎の直助權兵衛といふ配役だった、それ以來この事變となつて殊にこうした脚本の上演は至難となつたのを、こんど食満南北氏が改訂を加

へて出したのだから、夏向きだし、久方ぶりでもあり、この企畫正に金的を射て連日大入満員だったのも面白く、地下のお岩さまも微笑してゐることだらう。

こんどの上演を見ると、民谷伊右衛門宅、伊藤喜兵衛宅、髮梳き場、隠亡堀、三角屋



敷、蛇山の庵室、深川川岸の仇討まで四幕七場である、食満南北氏の改訂の勞は買ふが、やはり原作の味の薄く

なつてゐるのは止むを得ない。

髮梳き場の演出が存外叮嚀だし、隠亡堀もまづ辛抱出来る、殊に三角屋敷の出したのはめづらしい、この場も原作の不倫、卑猥さは巧みにカムフラージュされてゐるので物足りないとはいへ、この場の見られただけでも一つの收獲と謂へやう。

延若自身この大劇場の機構を思ふ存分に使つて、四谷怪談が演りたいとは、かねての念願だつただけに、丈自身大いにハリキツてゐる、お岩はあの肥満な體軀だけに無理だが、亡靈となつてからはその無理な點を巧みに補つて凄味を出してゐるのは流石である、殊に髮梳き場での毒藥の廻つて行く経過を指先きの痺れで見せたりなかく、凝つた演出を見せてゐる。二役の直助

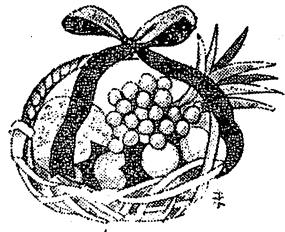
權兵衛は本役、お岩、直助、小平、お岩の亡靈、小平の亡靈と五役を車輪に演つてゐる。

宗十郎の伊右衛門はあの難聲に禍ひされて聞きづらく興味をいさゝか削がれるが、隠亡堀などわるくない、魁車の宅悦は少しにぎやかな嫌ひはあるが、輕妙に演つてゐる、壽三郎の與茂七、扇雀のお袖など一通り。

「御所櫻辨慶上使」は壽三郎の辨慶のあの押し出を買ふ、前にも演つたところがあるだけに心得てをり、魁車のおわさが思つたより控へ目だが好演である、芳子の信夫も見られた。

(寫眞は「四谷怪談」の舞臺面)

× ×



竹松
家庭劇の印象

— 七月の 中座 —

中 井 浩 水

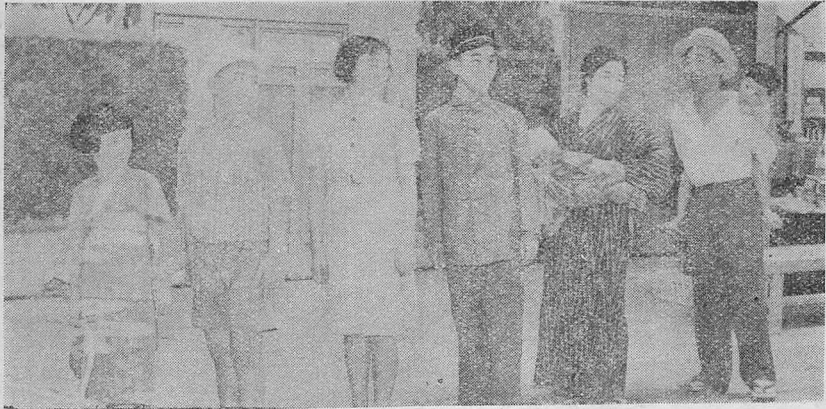
七月の家庭劇所演について何か書け
といふ、家庭劇の出し狂言七月上旬（
六月からかけて）

女波男波、花よみのれ、落した月給
袋、金太郎、大阪に電燈の點いた時
七月中旬からの分

職工と安樂椅子、眼鏡湯、エプロン
の花嫁、寶の土用干、十三字の幽霊
以上である、家庭劇は十吾、天外一派
の喜劇連と小織以下の新派連との二元

劇團である、しかし五つの狂言で新派
の受持は僅か一つ、あとは喜劇連のお
手傳ひの形、これを要するに家庭劇の
統率者は十吾と見ても好い、老優小織
今や無事太平を望み他の連中もこれに
追隨、イヤそんな事があるかと敦圀く
なら、獨立して小織以外で立派な大阪
新派劇を樹立して見るが好い、長い雌
伏はこの意氣を消磨してしまつたかの
観がある。

統率者十吾は故人十郎を想はせるや
うな味をいさゝか持つてゐる、殊に彼
れの老役は天下一品と折紙をつけても
好い、天外は乃父先代天外の滋味より
も年少薫育を受けた樂翁の藝風に似た
ボヤケがうまい、惜しむらくはこの一
座に立役、二枚目の達者がない、十吾
天外これに扮すると到底柄に倣らない
よつて新派側の森、元安、高田が扶け
に現はれるが場違いといふかピツタリ
と來ない、諦めた新派と偏食の喜劇團
これ家庭劇の弱味の一つ、更らに大き
な弱味は脚本、わけて喜劇側上演脚本
の低調、助演者の貧弱——しかし客は
よくやつてくる、子供づれの騒しさ、
舞臺と照應して客席でも家庭劇を展開
してゐる。所見狂言で前者ではク金太
郎々の十吾の婆さん、小織の酒ずきの



而臺舞しほ用土の寶

老夫のうまさと大阪に電燈の點いた時々の明治風俗史、文化史的な舞臺に興味を覺えたのとこの二つ、後者に至つては各狂言いづれも國策線に添ふことの忠實なる感ずるに堪えたり、職工と安樂椅子は俄かに小金の出來た職工が社長の眞似をして驕るを描いて世を警め、國民貯蓄獎勵脚本エプロンの花嫁で且つ銃後の花の健氣さを示し、寶の土用干で生め殖やせよを高唱し、十三字の幽靈で金を政府へ賣りませうと叫ぶ、時局相を舞臺に展開し觀衆を樂しませ、笑はせつゝも之れを導いて倦まず、時局下の大衆娛樂の典型的所演といはうか。

たゞ遺憾とするところはその脚本の低いこと、未成品なること、全く消化し得ざること、この間、珍とすべきは十三字の幽靈で歌舞伎座の延若扮するお岩さんの榮養過多、行動遅々たるに反して幽靈の出没、人形を使つたりして頗る味をやり、幕切り十三の幽靈の

出現にアツと云はせ、それがクルリと背を向けると金を早く政府へ賣りませうの十三字を一字づゝ背に現はした趣向は正に故人十郎はだしの妙案、十吾、莞爾として顎を撫で、可也。

(七月二十四日記)

恩給金庫

ダ長期融通御希望ノ方ハ金庫ト特約アル當社ヲ御利用下サイ

保険料底廉決定即日

御問合せ下サイ

早速御用立申シマス

手数料等一切頂キマセン

恩給金庫特約店

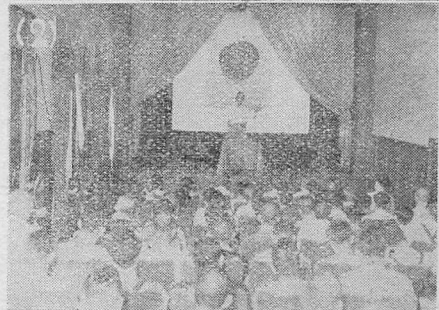
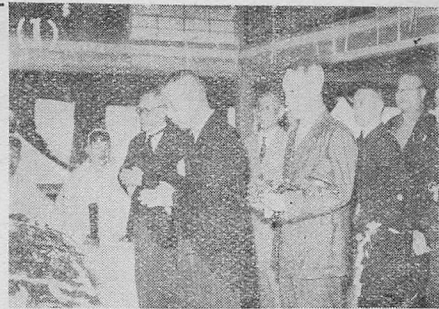
大阪、大江橋

福德生命浪速支部

支部長 萬代勘一

七 月 の

七月七日——聖戦二周年記念日笠屋町松竹白井會長邸では昨年の例に倣ひ、本年も、第一線に盡忠の花と散り護國の鬼となつた大阪市出身の英靈に對し、嚴かな慰靈祭が執行された、當日は英靈の遺家族を御招待して舉式、續いて遺家族の人々には各座希望の劇場へ御案内した。



七月十四日——張鼓峰事件から風雲は急を告げてゐる蘇滿國境、蘇聯の越境問題等々、國境の情勢は國民の緊張を促しつゝ、ある時、松竹大阪支店事務所では、蘇聯通の近藤義弘氏を招いて三階試寫室にて日蘇關係及び滿蒙國境の現状と題する講演を聽いて、事局に對する認識を深めた。

七月十七日——松竹大阪支店の大元老大川濃江氏を圍んで、明治時代の大阪劇界を聽く會が大鐵百貨店別室で開催された。

× × ×

笑の王國

笑の王國から、聳立つた流行兒は隨分居る、古川綠波を初め其の一座の面々、徳川夢聲(夢聲は解説者として有名であつたが、あの年で流行兒になさしめたのはやはり笑の王國に負負所があると思ふからメンパーに入れる)岸井明、三益愛子、藤田房子、清川虹子、サウロトクロウ、渡邊篤、山野一郎、中根龍太郎。小杉勇、瀧花久子も居た考へれば考へる程、皆、それ／＼個性のある名人ばかりだつたと思ふ、その演技の上に現代生活の表現が出来る點では、大芝居、小芝居、舊劇、新派、新劇を通じて、笑の王國以外にあるまいと思ふ、その分離したもののロツパ一座の人氣のあるのも當然だと思ふ。

今の王國にも、それ／＼名優が居る珍優も居る、珍優に

ム バ ル ア

七月廿五日——松竹白井會

長は北米から布哇の映畫

市場視察旅行のため、廿

六日横濱發の鎌倉丸で出

帆廿五日午後九時三十分

大阪驛發各方面の名士及

俳優従業員の歡送裡に

花々しく壯途に就く——

八月四日——中座は、五

日初日で、有名演藝人を

網羅して納涼演劇大會を舉

行、親日印土人シエス氏は

、ラツバの曲吹奏が得意で

類と喉でラツバを吹くとい

ふので、阪大病院の皮膚科

と神經科の權威にその珍ら

しい皮膚の診察を受けた。

同日——同じく中座の演藝

大會に出演の徳島富街の美

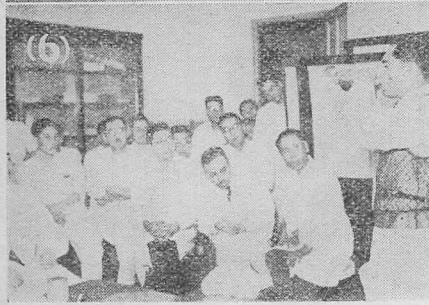
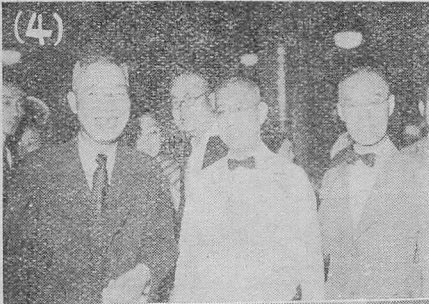
妓連十餘名は、名物の阿波

踊りを公演するがこれに先

立ち、大劇に松竹少女歌劇

「まつり日本」を見學ラスト

の舞臺で記念撮影をした。

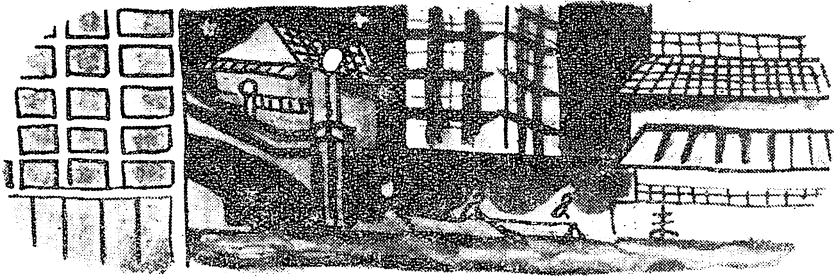


して克つ悲劇俳優である點、
笑談でなく、此れは恐ろしい
この一座の人々ぐらひ、新舊
を問はず、藝術的作品、フア
ース、オペラコントを問はず
のび／＼と恐れげもなく演技
する者は無い。

笑の王國では此れまで一つ
の狂言に幕合ひを取つた事が
ない、場所が淺草と云ふせわ
しい神經を持つ大衆を相手に
してゐるせも有るが、其の
爲に作者は脚本構成の上にか
なり苦心させられるので有る
併し其の爲に一つの劇の氣分
を中斷される恐れがなくな
つて好い場合もある。

王國は大阪へ行つて、何
か勉強で來やうとして居る
この劇團に惚れ切つてゐる
私は大阪の人と共に、彼等
の舞臺を然々赤の他人とし
て見物してその缺點を見出
すには屈強の時と思ふ。

伸 谷 屋 脇



初秋

木村富子

朝の橋道傾堀に残る灯のしら／＼として霧もる見ゆ

さやかに秋風わたる堀川の水を彩るかぶきの小旗

見せまくも歌舞伎の秋を白雲のをちに戦へりわが同胞は

そよ／＼と櫓の幕におとづる夕の風よはや秋は來し

前茶屋の軒を染めぬく宵の灯の色すがしくもなりにけるかな

夜の霏は白々として劇場の欄の灯かげにせまりくるかな

幕間の群をはなれて夕月の光秋めく空仰ぎたり



道頓堀十五年

(4)

— 昭和劇壇史 —

鳥江 鍊也

◎お詫び

本年三月號から初めたこの記録も、お蔭様で各方面の好評を呼び、いろんな材料の提供や激勵を頂戴してゐますが、六・七月の兩月號は意外に誌面に輻輳したのと、調査未了のため休載しましたが本月號からはスピードをかけて再出發致します。と時に休載いたしましたお詫びを申し上げます

昭和二年七月

中座は六月廿一日初日を出した曾我廼家五郎劇の打越で、そのお目見得狂言は七月六日打上げ、九日初日廿三日迄二の替りとして、

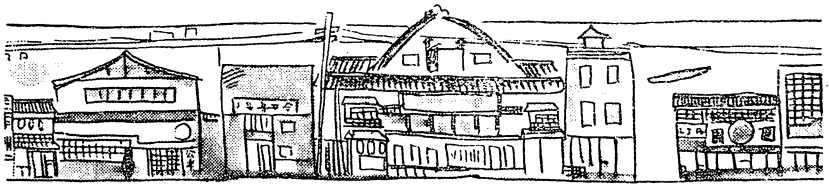
第一「昔氣質」第二「土曜の夕」第三「善悪

二筋道」第四「まぼろし」第五「選挙」の五狂言を出す。

浪花座は市川猿之助奮闘劇、二日初日である一座の顔ぶれは

猿之助、八百藏、小太夫、源十郎、歌門、翫右衛門、段猿、米五郎、笑猿、龜松、銀之助團子。

水入らずの澤鴻家一門、夏場らしい無人劇だが狂言の興味を呼ぶ。一番目木村錦花作竹柴兼三脚色「研辰の討たれ」五幕、中幕舞踊劇「猪八戒」一幕、二番目林和作「次郎吉旅枕」二幕



のオール新作陣、「研辰」の通しは粟津城待溜の間、大手馬場先の殺し、俱利伽羅峠春渡し、旅宿吾妻屋、丸龜二本松茶店、大師堂百萬遍、同裏手と珍しく通しの上場を受ける。猿之助の守山辰次小悪黨の新表現が俄然人氣の焦點となる。敵を討つ兄弟は八百藏、小大夫。大詰の大師堂裏手へ出る源十郎の坊主の巧さが眼に残つてゐる。

角座は新聲劇が前月からの打越、一日初日で第一行友李風作「御金藏奇聞戀寝刃」六場、第二湊邦三作中井泰孝脚色「藤馬は強い」五場を出す。この「藤馬は強い」といふ時代喜劇で中田大當り、以後彼の十八番となる。この狂言は十二日限り十五日からお名残りとして第一關口次郎作「女優宣傳業」一幕、第二松田竹の島作服部秀脚色「若き日の東海道」四幕八場、この大詰本水使用の立廻り。

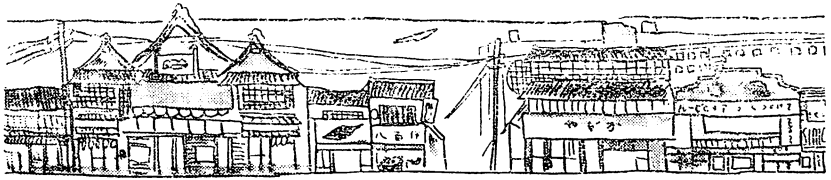
辨天座は「新派を正道に戻せ」の旗幟のもとに、梅島昇を中心とし松本泰輔、瀬川銀潮、堀内茂、森田肇、齋藤紫香、進藤英太郎、井上三郎、安原國哉、川浪一策、竹田幾三郎、大山彦雄、荒尾誠一、高梨依堂、高田亘、東愛子、福

岡君子、川上喜代子等、第一「本當の人情はこれだよ」八場、これは鳶と藝者を主人公に扱つた現代劇、新派の當り狂言「神田ツ子」といふのがあるが、それをいぢつたやうなもので、別に新味もなかつた。第二蠻界奇聞「胡蝶蘭」二場、臺蠻の生蕃娘と日本青年の純愛物語、嘗て明治期に川上貞奴が演じて好評を博したといふもので、これ亦大そうなスローガンに相應しからぬ愚劇、この劇團は一日初日で蓋をあげ、月半ばで打上げた。結成即解散の一回劇團。

實川延若一座は二日初日で松島八千代座に立籠る。狂言は

第一「繪本太功記」十段目、第二「鐘諸共恨鮫鞘」、第三「番町皿屋敷」等。

巡業一束——鴈治郎、福助、魁車、右團次、市藏等で中國路から九州方面の巡業、第一額田六福作「眞如」一幕、第二「傾城反魂香」將監閑居、第三所作事「墨ぬり」一幕、第四大森痴雪作「九十九折」二幕、我童、卯三郎等で東海道の各都市巡業、第一「赤穂義士傳」通し、この劇中に卯三郎の丑五郎などが挿入されてゐる第二「堀川」一幕、第三「廻山姥」一幕。



同年八月

例年の例に洩れず、この月は夏枯れの閑散期である。中座は内部改修のために休場。浪花座

は七月末から八月初旬へかけ柔拳大會。八月十月初日十六日迄の一週間を關西歌舞伎の勉強劇に提供されたのが目立つ。曰く技藝座の開演である。この技藝座は前年八月結成第一回公演を

試みた歌舞伎子弟の一座で顔ぶれは(いろは順)實川芦鷹、中村二雀、中村鷹之助、片岡我久

之助、中村魁童、中村成三、嵐村右衛門、市川右若、尾上卯多之助、實川八百藏、中村政

治郎、中村桂枝、中村福万壽、中村福彌、中村扇、嵐吉郎、坂東ゆたか、中村芝藝雀、中

村雀次郎、實川美鷹、片岡ひとし。狂言は第一「曾我譚」二幕、第二「義經千本

櫻」鮎屋、第三「道行初音の旅路」竹本常磐津連中、第四「鎌倉三代記」一幕、第五「日高川」

竹本連中、第六「勢獅子」常磐津連中の盛澤山。政治郎の「道行」の忠信、「鎌三」の佐々木、ひ

とし(今の芦燕)の時娘、清娘など好評。「鮎屋」の權太は八百藏、「鎌三」の三浦之助は鷹之

助だつた。暑氣休みの大名題連は特に弟子や子供のために舞臺稽古から附切りの指導ぶり。今日さうした光景の見られざるは少々淋しい感がある。

同じ浪花座に廿日から廿六日迄、四遊廊藝妓の舞踊大會が開催さる。

角座へは曾我廻家五九郎の來演、七月三十一日初日で八月十二日迄、第一「かくれんぼ」第二地獄極樂」第三「竹の柱」第四「刀を抜いて」

十四日から廿八日迄二の替り、第一「凄い酒」第二「心づくし」第三「浦の夕風」第四「嬉しい男」。

十三日の休日を利用して大軌の生駒納涼場へ五九郎は美しい女優群を引率して宣傳が

てら繰込み、あやめ池で野外劇などを演ず、この時代はまだ五九郎も元氣旺盛で、女優との艶聞など巷間の噂に上り人氣があつた。

辨天座へは保良鈴劇團が来る。この保良氏は今日の籠演演藝部の社長で、當時自分も舞臺に

立つて「鮎屋」の權太などを演じてゐた。一座には吉十郎といふ役者などがゐる。

神戸松竹劇場から山陰地方の巡業、幸四郎、延若の一座で第一「菅原傳授手習鑑」寺子屋、



第二「大森彦七」常磐津連中、第三「鐘諸共恨
鯨鞘」鯨谷の場、第四池田大伍作「男達ばかり」
一幕。

同年九月

改修工事完了の中座は、爽涼の氣と共に若手
の奮闘歌舞伎開く。顔ぶれは、

中村扇雀、中村成太郎、實川延太郎、尾上卯
之助、實川芦鴈、中村かなめ、市川箱登羅、
實川みのる、市川右左次、市川延平、市川右
田三郎、市川遊藏、坂東一鶴等。

一番目大南北作「謎帯一寸徳兵衛」三幕、中
幕小村李雨作「雲仙岳」一幕、二番目大森痴雪
作「緋鹿子地獄」二幕、大切「流星」竹本連中
清元連中、一日初日で十二日切上げの短期興行
月半ばの十五日から會我廻家五郎劇が歸演、廿
六日迄を打つ。狂言は全部新作揃ひである。

第一「紅蕃薇」、第二「色花緒」、第三「御手
車」、第四「陰日向」、第五「喧嘩デー」。

浪花座は關西歌舞伎の盆替り興行、顔ぶれは
坂東壽三郎、中村霞仙、實川八百藏、實川鷹藏
實川正壽、實川芦三郎、阪東豊之助、實川芦紅
阪東ゆたか、實川小鷹、淺尾關三郎、實川鷹若

實川若十郎、市川鰻五五郎、實川若藏、實川延
郎、市川鰻十郎、實川延若。

狂言は一番目林和作「三右衛門の賣出し」一
幕、二番目三遊亭圓朝口演「乳房榎」五幕の二
つ。延若がこの怪談劇で菱川重信、下男正助、
蜷三次、重信亡靈の四役早替り、大詰などは本
水使用で大いに残暑をふつ飛ばす。

角座は招生座といふ新派劇團の新組織俳優は
梅島昇、松本泰輔、和歌松新三、笠井潔、山
川實、白崎菊三郎、加藤精一、眞木章、吉峰
英一、齋藤紫香、高梨依堂、高田亘、小織桂
一郎、東愛子、英榮子、西山春江、和歌浦友
子、近松秀江、村田文榮、白鳥秋子、桃谷美
智子、米津左喜子。

出し物は第一段春人作「きもの」二幕（本誌
同年九月號所載）、第二川村花菱作「醫者の家」
一幕、第三三遊亭圓朝口演木村錦花脚色眞景累
ヶ淵三幕。一日から十二日迄。十五日から二の
替り廿七日迄は第一中井泰孝作「陸奥夜話」三
場、第二菊池寛作「貞操」一幕、第三岡本綺堂
作「わが家」二場、第四松本憲逸作「二人定九
郎」二幕。

辨天座は山口俊雄、小笠原茂夫などの新潮座
が掛る。一日初日で第一「親分廢業」、第二「雨
の古沼」など。月半から二の替りを出してゐる
京都南座へは我童、巖笑、右團次などで「馬
士地獄」「血判取」「鯉つかみ」などが出てゐる。

道頓堀の思ひ出話

大川 澱江

晝の疲れを忘れる一陣の涼風が、さつと軒端を訪れる、夕闇せまる竹椽に、風鈴の音を伴奏にして、澱江老人の夏の夜話は、遠き明治時代に思ひを馳せて、市井の風俗芝居の表裏さては浮世のくさ、ぐさ、なか／＼に趣き深く、盡きるところを知らない、澱江老人とは假の名、まことは道頓堀生え抜き劇界の生字引、もうこれだけ云へば、あの人か、と直ぐに読者も諒解さるゝ松竹の大川奥役その人、筆者は老人を促して、熱暑の現實から遊離して暫く思ひ出

の道頓堀、否、川竹の在りし面影を偲ばうとする（以下澱江老人口述筆記）

— ◆ —
まあ明治として置きませう、別に學問の話をするわけでもなし、二十年でも、三十年でも、そこは思ひ出のまゝ、といふことにして、目の底に浮んで来るまゝに、夏の涼み話から始めませうか、何しろ道頓堀の河水も今のやうに濁つてはゐず、魚釣りも出来たし、夏は近邊の子供達が泳ぎもしてゐた頃、エ、嘘ぢやありません、眞個ですとも、いまのやうに動かない溝泥と違つて、モツと流れも早く、風が吹けば美しい小波を立てゝゐたものでございます。

戎橋の北詰から東の濱側、富田屋の前、太左衛門橋まで今のやうに河岸に家が無く、美しい柳が一行に、川面へ枝を垂らしてゐたのですから、景色になつてゐました。これももと／＼家が無かつたわけではなくゝ鳥松といふかしわ屋丸萬の向ふを張つた々京與々といふ沖すき屋、また々

越伊々といふ名代のとろゝ屋、等いふ大厦高樓があつたのですが、火災で焼失して、跡へ建築することが許されなくなつて、自然濱側は濱の景色をとり戻すことになつたのでございます。



高島屋の右園次時代

魚釣りの子供達のよい遊び場所になつてゐたのです、夕暮れからは河岸へ涼み船や通み船の五、六艘が舫つて色硝子の行燈を船先に燈して客を待つてゐたものです、この通み船々は何處へ行くのかといふと、これは南の遊廓へ足を向けた旦那衆が馴染の妓や附添ひの女どもを乗せて、東横堀から、今橋へ出て、築地といふその邊の大川を廻つて福島邸前の打揚げ煙火などを観て思ふ存分一夜の涼を探らうといふ趣向。

中には築地の宿の名景色へ其まゝ逗留の翌朝歸りなんか

そこで越伊は堀江へ移り、京與は後に千日前の角へ移轉したのでした、勿論濱地の芝生は空地の少ない大阪のことですから、晝は、蜻蛉釣りや、

といふのもあつたわけで、藝妓達の間でも昨夜は築地泊りやわ、などといふ臺詞もあつたわけでございます、今のやうにネオンとかいふ色電氣もなし、船のクかんでらクを便りに月明りの川筋を、かうした船の流して行く、道頓堀や横堀の圍い涼しさ、この邊の光景はどうぞよろしく推測して見て下さい、國道をドライブして踏切で過ちを起したなどといふ話とは、ちよいと比べものにはなりません。

さて話は又濱側へ戻つて、向ふ河岸の芝居茶屋の方から此處を眺めて見ますと、宗右衛門町の茶屋、茶屋には、それ／＼軒行燈に灯が入つて、柳越しに見える風景、太左衛門橋の上には、兩側にいつぱいの店、通行も出来兼ねる程に、／＼ぜんざい／＼甘酒／＼枇杷羹湯／＼氷店には、金時、ぜんざい、白玉、二銭の文字、氷水、雪、みぞれ一銭五厘こちら側には、なんでも一銭で對抗する店、西瓜、眞瓜の店も入り交つて客を呼ぶ、太左衛門橋の南詰には、水船クがあり、これは町家へ川水を賣る水屋であります。桶に一荷が二銭五厘、井戸水の悪い町々は此處に限らず皆水賣りを呼んだものです、これは大阪全體の風景、さて橋詰にはもつと時代風景の／＼涼みあんまといふ店。

これは一間の床几を置いて、客も按摩も大肌脱ぎで涼みがてらの筋ほぐし、隣りの床几の將棋の戦ひに半疊を入れるといふ、まことにもつて天下泰平、大阪のまん中とは思はれぬ光景が目に入ります、かうして道頓堀の夏の夜は次第に更けて、やがて高津の森の邊りに大きな月がぼつかりと顔を見せるのです。

芝居の方は大方七八月は休みときまつてゐまして、見せ物々程度のものが客を呼んでゐるくらゐで、藪抜けなどは女子供にも喜ばれてゐたやうです、今の朝日座、その頃は東を向いてゐて、角丸の芝居は常に若手の芝居で人氣を呼んでゐたところですが。

俳優も夏の休みを持てあまして、若手の人氣どころが、劇場の前へ西瓜を積み上げて、道行く人に賣つたものです、役者の素顔のめづらしさに、仲々買手も集まつて、市中の娘達にも評判になつたほどですが、さて、娘達は遠く離れて、この西瓜店の役者を窺見をする、供の女中や丁稚が買ひに来るといふ段取り、此繪葉書にサインをして下さい、とづけ、俳優の前へ出て来る今時の娘さんとこゝにも大分心臓の相違があるやうです。

その頃、宗右衛門町の茶屋々々では、人氣取りの繁榮策に、例の柳の河岸で、毎夜盆踊りの趣向を樹て、藝妓末社は勿論のこと、仲居、おちよやん、飯焚きまで舉つて踊りに出たものでございます、踊りに交るお客、踊りを見る見物それは、賑やかなことで、夏の夜の人出はこれが爲めに湧き返るやうな有様で、まことに道頓堀らしい風景でありましたが、或夜芝居の休みのつれづれに遊び好きの我童（現今の仁左衛門の父）が之れは舞臺姿の趣向（伊勢音頭の福岡貢）で頬冠りをして、人知れず一夜踊りの群れに交つて出たので、之がまたワツと人氣を煽つた、これを知つた右團次（後の齋入）、我童が出たといふので、黙つて引込んでゐる人ではありません、しかも見物をワツと云はすことの好きなんですから、たゞの踊りではおもしろくない、當時行きつけの伊丹幸々に居たのですが、早速趣向を樹て、此の人らしく、四谷怪談のお岩の幽霊で踊りに出ようと云ふのです。

これが例の物凄こしらへで、薄暗い柳の樹の下から、する／＼と走り出たのですから、不意を喰つた大勢の女達はキヤツと叫んで、各々轉ぶやうに散り／＼になつて逃げ

失せる、右團次たるもの大得意の巻でございます。

サア道頓堀に幽霊が出る、然も踊りの列へ交りに來るといふので、流言蜚語はそれからそれへと尾をひいて飛ぶ始末、然しあまりに薬が利きすぎて、繁榮どころか翌日からモウ怖ろしがつて誰れ一人踊りに出ようといふものが無くなつてしまつたのでございます。

これでは折角の企てをした廓の連中が納まらない、一體この幽霊の正體はと、いろ／＼探索の結果、誰あらう、當



【門衛左仁代先】童我岡片

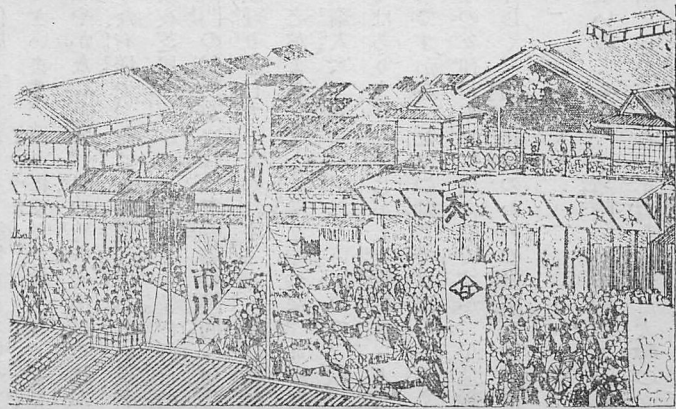
時大阪劇界の大達者市川右團次とわかつたから、たまりません、嚴重な抗議を持ち込んで元の通りにして返せといふ談判、とりあへず右團次は閉口

して弟子の團若を使者として平身低頭の謝罪をした上、目を改めて、今度はお岩稲荷の祭禮といふ口實を作つて我童を誘ひ、門弟や一族郎黨總出で揃ひの浴衣で賑々しく踊り出すと、これは大阪市中全般の大評判となつて、湧くが如き大賑はひ、見物は兩人の家號松島家、高島家を同時に合

はして／＼兩島家兩島家々と、舞臺以上の聲が、り、踊り騒動も幸ひめでたく覺がついたといふわけでございます

四谷怪談と云へば右團次、右團次と云へばお岩と、あの怪談芝居は道頓堀では天下一品の至藝となつてゐたもので右團次も

亦お岩を出すとなると大へんな氣の入れ方で隠亡堀を本水にしたのもございました、幽霊になつてからのお岩には、付き合ひに出てゐる、伊右衛門を始め大勢の講中まで芝居



る見を屋小居芝の堀頓道年初治明

とは思へぬ気がして、ほんとうに怖くなると、多くの俳優は口々に云つてゐました。

さらば本人の右團次は幽霊の所作について何か他の俳優とはちがつた心持や用意をしたのか、その邊一、二の話題がございしますが、先づ幽霊の歩き方、これは身體を斜にして迂るやうにする／＼と舞臺を走ります、さうして止まつたところで、異様な笑ひ聲でひ／＼と人を嘲けるやうな調子を出すのですが、迂るやうに歩くには兩足の運びがついてはなんにもならない、そこで、あの漏斗といふ縫ひぐるみの中で兩足を膝の處で細く縛りつけて足の交互に運び出さないやうにする。

又蛇山の庵室で、大勢の講中が百萬遍に熟申してゐるところへ、不意に出て、細い掌で顔を撫でる、これで講中は一時にヒヤツと驚いて逃げ出すのですが此の時舞臺へ出る前に附添ひの者に持たした水塊の上で充分兩手を冷やして置いて其の冷たい手で講中の顔を撫でることにしてゐたそれとは知らぬ講中に扮する役者は異様な手の冷たさに思はず大聲を揚げるといふ段取りになつてゐる、これはまこと、くだらぬ一例のやうで其の實は右團次は如何にいろ

／＼の點に細部の注意を拂つてゐたかが窺はれることゝ思ふのでございませう。

さてその頃は警察の取締りも寛大でありましたので、此



笑 巖 嵐

の幽霊の出どころが毎日替り、見物の意表に出た處から不意に飛び出す、時に見物席からも出る、假花道からも出る、現はれると同時に客席の女達

はキヤツと悲鳴を揚げるといふ有様それが又人氣に投じる、噂をひろげるといふ次第で益替りの芝居はいつも高島屋の呼び聲が高かつたのでございませう。

元來、夏と怪談はいつの頃からの因縁やら、附き物になつてゐるやうで芝居の方にも随分澤山な狂言がございませうが右團次の方には例の有名な鯉掴み々の芝居がございませう、これは怪談といふ程の凄味はありませんが、そのかはり大仕掛けな水藝で有名になつたのでございませう、これにはだいたい右團次のク工夫好きくな凝り性の話がございませうから、暫らく此方へ話を向けませう。

狂言の筋は他愛もない草艸紙の物語のやうなもので、新舞臺清水參詣といふのが本名題ですが、大きな鯉を退治する大話の場がやまでこれがいつかく鯉つかみといふ通り名になつてしまつたのでございます。

此狂言の書卸は、明治九年七月、道頓堀角座で、右團次の爲め、勝彦藏が書いたもので明治二十九年八月より九月へ打続けしが鯉つかみの水藝で、その後大正三年九月、右團次は東京本郷座で多少の改訂を加へ、馬琴の着想である



市川市十郎

清玄と小櫻姫を匂はせて
々浦昇水鯉漉々といふ名
題で不演して居ります。

梗概、釣島家の息女小

櫻姫は、信田左衛門清玄

から懇望され、否といへ

ばお家の重寶龍神丸を關白家に獻上せよとの難題、姫には瀧志賀之助といふ二世を誓つた戀男があるし龍神丸は紛失して所在が知れぬ、姫は毎日悲嘆の涙にくれてゐた、此處に琵琶湖に年古く住む鯉魚の精が、釣島家の先祖に對する恨みから姫の戀人志賀之助に化けて、姫を誂かす、お家

の忠臣篠原次郎公光と妻の山吹は、志賀之助と力を合はせて遂に鯉を退治し志賀之助は龍神丸を手に入れて目度く小櫻姫と祝言の盃をする。見物のヤマは二幕目の市原野で小櫻姫が螢狩の場で、志賀之助に化けた鯉の精が、横笛を吹いた若衆姿で、舞臺端の水槽から、せり上りになるところ、然も全身には一滴の水も濡らされてゐない、といふ見せ場、其の次ぎはこの鯉が現はれて、本舞臺で宙釣りになり舞臺際の天井から、宙釣りの釣を外れて水中へ落ち込む同時に早替りで勇士の志賀之助に成り、揚幕から、人間の入つた縫ぐるみの鯉にまたがつて、花道一面の水槽を泳ぐやうに、舞臺では大雷雨、志賀之助と鯉は水中の大格闘を演ずる。

右團次は度々の上演にいろ／＼工夫を加へてゐました、或夏但馬城の崎の湯治場で、助手をする弟子達といろ／＼水中での身體の工夫をつけて、上演した時には更に一層の喝采を博したものでした、すこし水中演藝の種あかしをいたしますと最初若衆姿で水の中から出る時には、水中にカバンといふ大きな金具の口のついた防水の袋、つまり大型のものを作つて置いて、此の中を衣裳をつけて通り抜



村中 治郎

ける。

水面でカバンから出て
宙釣りの金具に釣られて
出て、花道の附け際へ下
りるのですが、奈落から
此の舞臺へ出るまで、多

くは助手の力が與つて功を奏することになります、此助手
は多くは水中に潜つてゐなければならぬので大變な仕事で
す、これを樂屋では河童と呼んでゐました、今はモウ此の
世に居りませんが門弟の齊五郎や右左次が、なか／＼立派
な河童であつたわけです。

これを手際よくすますと、此度は千萬に一番の兼ね合ひ
大欄間まで釣り上げた右團次を、不意に鉤を外して振り落
す、水煙りを上げて身軀は水中深く潜り込む、右團次の身
軀が沈んでくると、その水中に待ち受けた河童が大急ぎで
之れを奈落へ連れ込んで、水から揚げる、又大急ぎで衣裳
をつける、花道へ駈けつける、揚幕から出る此間が五分と
はか／＼らない早替りの事だから、實に大變な仕事です。

劇場の方から云つても、客席から奈落へ亘つて深さ數十



代梅 玉福助 時代

丈の水槽を作つたり、花道の板を取り外すと全面の水、そ
の舞臺での夕立の仕掛け等、可なりの大仕掛けですが之れ
が現今とちがつて、萬事に不自由であつた明治時代のこと
ですから、ちよつと一朝一夕のことではありません、とこ
ろが、かういふ仕事についても考へられますことは、この
は不自由であつても精神力で出来る、といふことで、この
ごろの戦争のやうに、日本精神は何處にも見出されるわけ
でございます。

門弟の助手を勤めた河童の一人がある時、こんなことを
云つてゐました、齋入老は宙釣りから水中へ落ち込んだ際
間、泰然自若として殆ど一個の石塊のやうに無心になつて

助手に全部を任してゐた
が、その俸の右團次の時
は此場合どうも落ちつき
が悪くて、身軀を扱ふの
に骨が折れた、やつぱり
かうした場合にも覺悟が

ちがふのかも知れない、何しろ、えらいものでした、とか
ういふのです、即ち此邊が精神力の相違かもわかりません

元よりかういふ離れ業ですから一步間違へば命にかゝることですから、誰しも、平氣でゐられる筈はないことではうが。

右團次の水藝には、まだ他に怪談小幡小平次々があります、これもやはり同じやうな大水槽を作つて、やる芝居ですが、仕事は大同小異ですから、水藝は先づこの〆鯉つかみ〆が代表狂言でもありませうから、小幡小平次は略して置きますが、仕掛け物、の好きであつた右團次は



申 村 珊 珊 郎

ケレン師などといふ、少々侮辱的な言葉を受けても、飽まで見物の好奇心に投ずるやう、出し狂言をするたびに、必ず見物の意表を衝く工夫を凝らしたもので、これには生命の危険をも顧みないといふ、まことに意氣の熾んなものがあつて、如何なこと、他に眞似手はなかつたのであります。

今度はかうした方面の右團次を、いろ／＼の方角から眺めて見るのも、おもしろからうと思ひますし近ごろ流行の

レビュウの舞臺の好きな若い方々にも、御参考にならうと思ひますから、其の邊のことを思ひ出しますせう。

舞臺の上へ新らしい工夫を使つて見物の眼を驚かさう、と右團次はいつも考へてゐたのでございます、それが狂言なら尙ほさらのこと二度三度とやり來つた狂言でも、何處か一個所でも工夫が無ければ出なかつたと云つてもいゝくらゐでございました、「法界坊」の芝居でも、いつもなら、揚幕から、葱籠を提げた、おくみで出る、あの隅田川堤の場でも、或時、この工夫好きの右團次は、何うしたかと申しますと、いつもの娘姿ではなく、意外にも骸骨の姿で葱籠を提げて出て花道の七三で、すつぱりとおくみに早替りをするのでございます、當時の見物は、それで十分に満足して高島屋、と聲がかゝつたのでございますから、他愛の無いことのやうに思へますが、理窟は抜きにして、なんでも見物を満足させやうと懸命の努力をしたところはなか／＼買つてもよろしいところかと存じます。

『佐倉宗吾』の芝居では、堀田の邸の場で家老堀田の豪奢ぶりを見せるために、侍女の一人が、大きな花籠の御所車に秋草をいっぱい盛り上げて、廣間に見立てた舞臺へ、

花道から、此車を曳いて出ます、よきところに止まつた時分に急に舞臺が暗くなつて薄ドロになりますと、侍女は驚いて馳け込んでしまひます。

ところが捨てられた御所車は、人も曳かないのに、獨りで、舞臺をくるり／＼と歩き出します、さうして、御殿の中は一層妖氣が立ちこめて、遂にはその花籠の中央を二つに割つて、は殺された宗吾の亡靈が現はれるといふ趣向でございます、勿論見物は大喝采で、受けたものでございますが、この種明しは申上げるまでもなく右團次の宗吾は最初から其花籠の中に入つてゐて、侍女が入つてしまつてから、花籠の中に仕掛けてある把手で車をまはして、歩き



郎珀琥村中【優俳の治明】

まわるわけでございます、これなどは、まことに美しくもありません。これと同じやうな趣向

で例の箱根の「馬子地獄」の芝居で、湯煙の中へ馬を曳いた馬子の亡靈で出ようと工夫をしたことがありましたが、どうも馬の幽靈ばかりは、うまく行かず、とう／＼中止したこともあり、そのほか「お染の七役」「大黒」「狐喰」などの所作事も、皆それ／＼見たところの變つた趣向で見物を喜ばせたものですが例の石川五右衛門の葛籠抜けは可なり有名になつて幾度も上演されたものですが、或時尾の道の興行の時に、例の花道の宙釣りの眞最中ロープが切れて見物の眞中へ墜落した椿事が起りましたが幸ひに本人には大した負傷も無くて済みました、其時、東京の方で右團次と同じやうに、いつもお化けの早替りで見物を喜ばせてゐた五代目菊五郎から切實な見舞状と共に、宙釣りで墜落したからとて、此後これを止めるやうなことがあつては不可ない大いに今後とも張りきつてやつて貰ひたい、といふやうな激勵の手紙が来たものでございました。

菊五郎と云へば之れも又右團次以上の工夫好きで、おまけに珍らしいものを、とり入れるのが自慢と來てゐましたから、スペンサーの風船乗り、チャリネの曲馬など、すぐに舞臺に取り入れて上演したもので、怪談ものなどは仲

々のお得意だつたやうに聞いて居りますが、お化けの提灯を一つ調製するにも、わざ／＼本所邊りの遠い所の提灯屋に命じて、舞臺で使用する以外の不思議な形ちの提灯を誂へて、わざ／＼これを廻り道をさせてまで、市中を練りま



【明治俳優】尾上多見之助

わり、歌舞伎座へ運びこませたものだからでございます。

沿道の人々や通行の男

女は、そら菊五郎のお化

け提灯だと、これが前景

氣にもなつたのでございませうから芝居と見物といふものはやつぱり双方から持ち上げてこそおもしろくなるものなのでございませう、さて今度は呑氣な涼み芝居のお話に移りませう、現今の御方がお考へになりますと、夏の夜にやる芝居だから涼み芝居と名附ける、ぐらゐにお思ひになりませうが、涼み芝居と申しますのは、本來は七、八兩月は芝居はすべて休演なのでございまして、其間の暇つぶしや小使ひ隊ぎにやる芝居が即ち涼み芝居で、普通の三十三日建てなどところがつて、勿論わずか十日か十五日ばかりの短期

興行でございます。

九月の中旬以後から開けますのを益替り興行と名づけてこれからが即ち本格興行に移るわけでございませう、ですから、涼み芝居といふものは、云はば純營業ではなくお道樂興行なのでございませうから何んとなく呑氣なところがありません、で一面にはそこに自由なくつろぎもあつて、見物料も安いのですから、なか／＼大當りを取ることもあるわけでございます。

或時、右團次が大達者になつてからのことでありますがかうした涼み芝居が、天満の大江町の芝居（現今の八千代座其頃は天神裏門通りが表入口）で若手を集めて開けられることになりました、市川助藏（五代目緞十郎の倅）嵐巖笑、中村福升、實川百々之助、其他若手ばかりの芝居であります爲めにその大切の一幕に、右團次に出て貰ひたいといふ仕打からからの交渉がありました、若手の連中は「根岸御行松」といふ續き物の狂言で、これが勉強芝居、右團次には「二本櫻の道行と御殿」といふ獻立ですが、如何に大達者の右團次でもかういふ場合は、出演の給料は、々包み金々といふので仕打からの目分量で渡すだけなのです。

右團次は勿論、夕暮からの涼みがてらの出演ですから寧ろ散歩にでも出るやうな気軽い氣持で行けることが楽しみで出勤をすることになりましたが、勿論かうした人氣俳優がいざ一步外出をしないと仲々大變で、給料の包み金などは何の足しにもなるわけでは無かつたのであります。

そのころ右團次は竹屋町の八幡筋と三ツ寺筋の間に住んで居たのですが、丁度近くの大和橋の下へ通ひ船を着けさせて、大勢の弟子や酒肴の用意をさせて、まるで、遊山船のやうな騒ぎで、夕刻から此船を漕ぎ出して東横堀川から今橋を流し、天神橋の北側へ着船するといふ段どり、沿道では、々そら右團次の乗込みや々と嘶し立てる見物の群れなどで賑やかな有様です、右團次は首抜きの大模様の染め抜かれた縮緬の浴衣、腰には根附つきの煙草入れ、草履ばき、といふ當時の俳優好みの姿態で、天神裏まで大勢の弟子を連れて、ぞろり／＼と樂屋入りをしたものでございます。

さうしたことから人氣は盛んで涼み芝居には珍らしい大當りを取つたものですから仕打の方では、大きに味を占めて、毎年夏になるとこれを申込んで來るのですが、右團次

とて、非常に出費になるのでこれは一夏限りで、其後は出て居りません、それに反して弟子達や、金剛、附添ひの連中は、夕暮れからの涼み船で、御馳走は出るわ、芝居は樂だし、打出しの後には、天神裏の「鬼茶屋」へ有名な龜の池の稻荷鮓の角で汗をいれて、又船で道頓堀へ歸れるといふまことに弟子達の世界でありましたが、如何にも呑氣な心持が明治時代のお話として、ふさはしい事と存じますさて今度は大芝居の涼み芝居のお話を申します、勿論道



仙霞村中【優俳の治明】

頓堀〇〇座でのことでありまず、これは宗十郎、鷹治郎、右團次といふ大一座で、狂言がおきまりで「夏祭浪花鑑」の通し狂言、團七九郎兵衛が右團次、一寸徳兵衛、女房お辰が鷹治郎、三河屋義平次が琥珀郎、玉島磯之丞が巖笑、娘お仲、團七女房お梶が多見之助（後に多見藏）、釣船の三婦が宗十郎といふ役割でありましたが、宗十郎に三婦一役では、あまりに勿體ないといふので座の方では、もう一つ「伊勢音頭」を出して、福岡

貢を宗十郎に受持つて貰ふ交渉をしたのですが、こゝで普通の俳優なれば、涼み芝居のこともあり、一役藝澤山でと辭退するところでせうが、にかけては何處までも眞面目な宗十郎は、福岡貢どころか、かう云ひ出したのです、貢なれば演る方では帷子ばかりで涼しくてよいが、見物へ對して相すまぬ、そこで重の井の子別々を出すと云つて來た。

仕打側ではお志しは結構だが、重の井は中幕物だし、切狂言として見物に受けるかどうかわからないし、第一は重の井では鴈治郎が付き合ひに出る役が無いから、どうか伊勢音頭の方でと再三懇願したが、どうしても宗十郎は聽き



【優俳の治明】
郎三徳 風 代々先

容れない、そこで仕打も遂に根負けをして、宗十郎の云ふまゝに夏の祭のあとへ重の井といふ、随分重ぐるしい涼み芝居を開けてしまふことになつたが、さて初日を出して見ると遠は宗十郎、やっぱり見物を満足させて、大喝采を博したのだから、えら

いものだと、知ると知らぬをうち交せて感心させたものでございまして、重ぐるしい襦袢姿の重の井を眞夏の切狂言に出した宗十郎も随分亂暴な話ですが、その頃片岡我當（先代仁左衛門）は、太閤記の十段目を夏衣裳で見せて、これは却つて大失敗をしたことがあります。

遠い元祿の昔から、現在に至るまで、三百年近くも、道頓堀の水の流れと同じやうに相變らず續いて來た歡樂の街の燈火は、目を逐うて盛んにこそなれ、寂れたことはいまだ曾て聞いたことはございませんが、明治十六七年頃は、世の中の文化と風俗の移りかはりでもありました、名物の五ツの櫓にも建て替の興つてゐるところが、ちよい／＼ありました。

中の芝居は「日本振袖始」といふ素齋尊を書いた狂言が、火に祟つたといふことで、火事を出して建て替になりました、角の芝居もその頃、東京の新富座を眞似た新しい型ちの劇場にかはりました、その隣へ、角丸の芝居が朝日座にかはつたのもその頃でありました、この角丸の芝居は現在のやうに道頓堀に面してはゐなかつたので、東を向いてゐました。

もう一つ東の辨天座の西横の筋を竹横と申しました、竹田の芝居の横、即ち竹横の名の起る因でせう、この竹横に東西兩側とその頃、新内の定席がありまして、西側のが男の新内で鶴賀金蝶一座、東側のが女の新内で、岡本小美八一座で、この兩座が、なか／＼人氣をあげたもので、いつも競争で人氣争奪をやつたものですが、いつの世にもかはらぬことは、やつぱり美しい娘どもの集まりである。小美八一座の方が、だいぶ優勢なやうに見えました。

前に申しました、角丸の芝居が、その頃はチンコ芝居／＼即ち子供芝居、で十四五歳から十七、八歳までの歌舞伎の玉子が、修業かたがた大人の俳優の眞似をしてゐたのですが、これも亦愛嬌が賣物でなか／＼人氣のあつたものです、時には宣傳に如才の無い、小美八一座の同年輩の小娘達が、このチンコ芝居を應援する形ちで、美しく着飾つて總見をするやら、ヒイキの俳優へ贈り物をするなどで、賑はつたものですが、チンコの方でも亦直ぐに之れに報いる連中見物を催して、新内の席へズバリと顔を並べたやうなこともございました。

このチンコ芝居の方では、後にも相當名を残した俳優も

ありますが三桝鶴太郎、嵐福利之助、中村門三郎、中村芝梅、などのが其頃のチンコの名でございませう、勿論チンコ芝居と云つたところで、特別な俳優であつたわけではなく後の鷹治郎でも誰れでも、たいていは、かういふチンコ芝居から修業をして一人前の俳優になつて來たもので、子供ばかりで一座を組んでも世間はこれを育ててくれたのですから、現在から考へると以前の見物は、なか／＼鷹揚なところがありません。



【明治の俳優】 市川荒五郎

／＼猿ヶ島合戦といふお伽噺から取つた子供らしい狂言があるかと思へば／＼接木根岸礎／＼など、新作狂言

を大眞面目でやつたり、なかなか火の出るやうな勉強をしたものでございます。

その後、角丸の芝居と辨天座の中間の位置に若太夫の芝

居があつたのが廢止になつたので、この角丸の芝居を、道頓堀の方へ向けて五座の櫓を並べる計畫が起つたのでございます、明治十六年の二の替りの芝居が最後で、この角丸の芝居の名稱は此世から影を消したのでございます、次の朝日座が建ち上るまでは暫らく空地のまゝで、女の子の「おんごく」の聲や男の子の「大和の」の源九郎さんの遊び聲が聞こえ、澤山な出し店も出て、遠に盛り場らしい光景を見せて居りましたが、芝居から手すきになつた



【明治の俳優】實川延三郎

を擧げることになりました。俳優が松尾猿之助（後に市川段四郎）嵐佳香（後に嵐璃珪）中村芝鶴（後に中村傳九郎）中村芝雀（中村雀右衛門の弟）等で、狂言が「壽三番叟」「金鳥王免藏箱入」「又朝日の座名に因んで」「倭魂朝日旗揚」「（安倍仲麿入唐記を書いたもの）で猿之助の吉備大臣、

佳香の安倍仲麿が評判で先づ賑やかな開場式。

かうして道頓堀五座の櫓が初めて確立したわけでございます、改めて申上ぐるまでもないことでございますが、西方から數へて戎座、（浪花座）中の芝居、角の芝居、朝日座、辨天座、辨天座も以前は竹田の芝居と、申して居りました、その頃戎座へ嵐璃珪が東京から歸阪しまして、堂島やざこば、の大變な應援で、五代目菊五郎の當り狂言である「菊模様新渡花皿」をお土産狂言として、璃珪は、お蔭の幽霊と魚屋惣五郎の二役を演じたことがあります、磯部主計之助（宗十郎）、浦戸十右衛門（延若）、浦戸紋三郎、子分三吉（橋三郎）といふ役割です。

大阪の俳優が江戸つ子の狂言を其の儘に持つて歸つて上演するなどは、如何にお土産狂言とは言へ随分大膽な話ですが、果して一般には受けなくて、その大膽さと努力の點は相當劇通の間に買はれたやうでございました、ところが盛んな應援入りの興行だけに二十八日間満員つゞきといふ盛況でありましたが、これは前狂言に延若の渡邊綱、宗十郎の頼光で傾城大江山が通り狂言で「羅生門」が出てゐるので、これが多くの客を呼んだのであらうといふことであ

りました。

土用丑に、鰻の値段のことから産地と大阪とで、折合がつかず、鰻上りに高値になつたが、たうとう手に入らず休業しましたが、大體土用丑の日に、鰻を喰べる習慣がいつ頃から始まつたものか、何の爲めに喰べるのか、はつきりした事情はわかりませんが、わかつても、わからなくても、別に差支へのあるほどの大事件でも無ささうでござい
ます。

ですが夏季は兎角身體が衰弱するので、脂肪性の強い鰻によつて榮養を補給する、といふ説が一番合理的で、此の説が多數を占めてゐるやうでございませうが、眞理に近いほど此の説には、面白味はございませぬ、それよりも夏季は兎角商工業が不景氣で、金廻りが悪い、従つて高價な鰻などは買はない、これでは鰻屋がやりきれぬ、そこで、或賢い鰻屋が思ひついて土用丑の日に、鰻を喰べると、ことによつて七十五日も長命するやうに宣傳した。

と、かういふ説の方が、まことに商賣どこの大阪には相應しいことと思はれます、はなはだ餘談を申上げて恐れ入りますが、元來鰻といふものは唯今でこそ、大衆の食味

に上りますやうに其の道の御商賣が勉強をなさいますが、其の以前は仲々日常に鰻の香りを嗅ぐなどは思ひも寄らなかつたことで、鰻と云へば、鯛よりもまだ貴重なものやうな氣がしてゐたのでございませう。

芝居道の方でも、鰻といふ言葉がかういふ風に使はれて居りました。お仕打の方から使者が立つて、俳優に對して是非とも或持ち役以外の一役をさせたい時、その使者は俳優に對して百方説きつけて勧誘をした其、最後にきつとか



朝正 川實【優俳の治明】

ういふのです。親方どうぞ氣ようひきうけとくなはれ、そのかはり鰻を買ひませう。この鰻を買ひませう。といふ言葉は寔に意味深長で、その實は定給以外の金を拂ふといふことを云つてゐるのでございませう。

只今では小學生だけの遊びとなつて居ります。齡髯つりを大人までがやつたのですから、まことにこれも呑氣な話です。

ございます、夏に入りますと大勢の人に混つて若い俳優達も競つてこれに出かけたもので、掛け茶屋で編笠のやうなものを借りて、これで中空に飛んでゐる蜻蛉を一方は竹竿で叩き、手の届くところへ来てこの編笠で伏せて捕るのでございます、互に捕つた蜻蛉の数を争ふなどと、只今の釣堀の魚釣りと似たやうなものでございます。

若い俳優が道傍で出逢ふと、こんな話が冗戯に持ち出されます『やんまぎやうさんつつか』「うんにや、きのふ



【優俳の治明】
先 郎三橋 鼠 代々

はちつともつれなんだ
そのかはり晩には赤い
やんまやつたぜ』「おい、どんなやんまや聞かしてんか」赤いやんまをつり取つた若い俳優は意氣揚々と引あげて行きます、晩につつた赤いやんまといふのは申すまでもなく南邊の金魚のやうな若い女のこ

とをいふのでございませう。
かうした遊びのほかに借馬々といふのもまた仲々に人氣のあつたもので、只今の南海電車の邊りに、黒板塀で圍

はれた、小さな馬場がありまして、この板塀に提灯が一つ出て、丸の中に馬といふ字が一字書いてありました、馬場の中央に厩舎があつて四五頭の瘦馬が繋がれてゐて、馬場の入口に客受けがあり、たいていは女主人が娘が馬の駆ける數取りをしてゐたものでございませう。

三周くらいといふことになつてあつたので、夢中になつて駆けてゐるうちに相當な値段になるのでございませう、然しいくら駆けたところでこの馬場を降りまわしてゐる分にはたいしたことも無いのでございませうが、若い俳優などはよくよからぬ馬丁のお世辭につられて、つい遠出をしたり悪い遊びにそそのかされてひどい目に逢つたりするものもあつて、この借馬に凝り上げたものを當時は馬極道と云つたもので仲々よく流行したものでございませう。

序ながら難波近邊の賑はひを申上げますと、その借馬の向ふ側、東角には當時有名な「卯の日餅」といふ茶店と兼帯の餅屋があつて、これがまるで道中繪を見るやうに、澤山な掛け床几に、住吉詣りや、堺通ひのお客が腰をかけてゐたものでございませう、又借馬の西隣りの方には相撲場があつて、春秋の本場所には大きな筵圍ひが出来、夏には、

素人や玄人の取つたり見たり、といふ夜相撲も盛んに行はれて居りました、力自慢の若い衆が、紙一折、手拭一筋の懸賞に誇りを感じて盛んに出入りしたもので、難波村と呼ばれたその頃の賑やかさは以上のやうに只今とひきくらべて、天地の相違がございました。

夏にかぎつたことはございませんが、今度は涼しいお茶席の話、俳優中では、なんと云つても、市川齋入が一等のお茶人、これは東西俳優中でも、めづらしかつたぐらゐで上本町の廣大な邸内には濛い好みの茶席を有つて居られました、かういふと、あの右團次のケレンを交へた派手な藝風と如何にも正反對で、別人の觀があります、その邊がかへつておもしろい味ひのあるところかも知れませんが、宙釣りや早替りの藝の工夫が、濛いお茶席から生れてくる、などは外面からは想像も及ばないやうに思はれますが、そこに齋入といふ人の藝が單にケレンの爲めのケレンで無くこれは時代に即した大衆性を考慮に容れたもので、その本質はやつぱり眞剣味、輕薄な當て込みや、何んかで無く、眞底から見物へ體當りをして行くところなど、つまり凡優では無かつたことと思はれます。

たいへん理窟くさい話になりましたが、齋入翁をたゞのケレン俳優では無かつたことを申上げる爲めにちよつと脱線をいたしました、齋入翁としての平常の人物を見ると、その點、茶をやる人、にはなりきつて居りました、底深い濛い人格、さうして何處やら飄逸な味をもつてゐるところ、然かも恬淡として執着の無いところ、晩年に至つては、殆ど完成されたよい人格の老翁でありました。

さてこの人がいつの頃から何が動機で、茶を嗜むやうになつたのか、それは不幸にして、私は知る機會がございませんでした、若い若から、お茶の趣味があつたと思はれることには、樂屋化粧の道具の中に、棗の茶入に水油を入れて鏡臺前に永らく使用してゐられたところを見ると、多分さう信じてよいことかと思ひます、役を濟まして、白粉を落すには、この水油を塗つて拭きとるのでございますがこの棗の茶入に、こんな話がございませう。

蠟色塗りのたゞの平凡な茶入、だと思つてゐたのが、實は齋入老は町の小道具屋で一分かそこらで買つて、永年何んの氣なしに水油入れにして使つてゐたのですが、妙にこの棗の出来榮へに氣を惹かれたものか、後年水油を入れる

ことを止めて、元の茶入として使ふ氣になり、以來、舞臺の隙などに鏡臺前に座つてぬるつれづれに、丁寧にカラ拭きを始めたのでございます。

毎日拭き慣らして居りますうちに、なんと不思議なこともあるもので、丹念に拭いてゐますとその一見平凡と見える蠟色塗りの茶入から時々、キラ／＼と閃光を放ちます、なんの爲めに光りを放つのか、それは、わかりませんが、したが、間もなくこれが、出入りの茶道具屋などに聞えて評



【明治の俳優】
先代 三吉 風嶺 三郎

て、これが同家に傳はつて居ります。

怪談芝居の本来本元に、こんな怪異な茶入れの傳はるのも不思議と云へば不思議ですが、齋入翁はかうして日常茶を嗜み、時には客を招じて大茶會を開きなどし、その道の

判になり、言ひ傳へ聞き傳へ、遂には百五十圓まで譲り受の申込がありました、勿論手放しません、夜櫻々といふ銘が付い

ことはかな／＼素人の領域を脱してゐたといふことであります、支配人の井上傳之助（故市川新升の父）や故人門弟の市川齋五郎など、家門から相當な茶人を出してゐることを見ましても可なりな深い趣味をもつてゐたことと思はれます。

さて、この茶席に加へて、もう一つおもしろい話は、齋入はこの茶席で藝の工夫をする、あたりまへなら、心耳をすまして藝道に徹するといふところかも知れませんがいつも齋入の側には、小さな一個の秤が身邊に附添つて居りました、芝居の科を工夫するのに秤とは、まことに奇妙な對照で、おわかりになりますまいが、實はこの秤によつて、いつも宙釣りの呼吸と平均を測定してゐたもので、それによつて適切に實際と當て嵌つたかどうかは聞いて見ませんでした、秤だけは始終身邊を離さなかつたやうであります。

「小栗判官」の馬と人の宙釣り所作事の々傘々のお化けの宙釣り、などを見ますと、その釣り工合ひの平均のとれた形ちは、これは此道に苦勞したものでないとわかりません、何しろ一本の綱によつて吊られたものが、いつも平均

を保つてゐるといふことは、なか／＼難かしいものであることは、おわかりになるであらうと存じます、「五右衛門」の葛籠の如きものでも、葛籠を置いたまゝの姿で宙に浮かなければ、これが前へのめつたり後ろへ傾いたりしたのでは、おもしろくありません。

然かもその小さな葛籠の中では大きな衣裳を着て、長い太刀まで佩いて縮まつてゐる人が在るのですから、これを平均な形ちで釣り上げるには、その宙釣り金具に非常な工夫が凝らされるわけであり、人を吊るところは後頭部邊りにきまつて居ります、葛籠は中央を吊らねば平均しません、そこに大變な喰ひちがひがございます。

この喰ひちがひを、金具によつて、案配をするわけで、かうした工夫を鍛冶屋ばかりに任して置けませんので、自分の工夫が必要になります、そこで秤が側を離れないといふことになるわけでございます。

一見ケレン芝居と云つてしまふにはあまりにも徹底した工夫がございました、その勞をいとはずを通り越して、齋入翁の場合は全身を打ち込んでその工夫に没頭してゐるといふ方が適當で、沉んや己れ一度その舞臺に現はれるや、

試験中の金具であらうと、危険を忘れて、颯爽と勤めるのですから所詮は人から教へられて出来る仕事ではありませんでした、まことに水火の中を辭せずといふ命がけの舞臺は、ケレン芝居と一言に片づけるのは、あまりに勿體ない氣がいたします。(完)

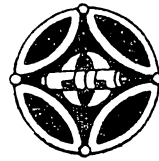
大阪人なら一度は
美松の名物みつまめ
男も女もみつまめの部族でバイです

味のデパート
美松
大阪に産地

◇近世上方名優傳◇

中村宗十郎 (四)

高谷伸



でゐたのだがそつと大入場へ入つて客に混れて璃寛の葛の葉を見ると意に充たぬものがあつたので徳藏には追つての相談といふことにして宗十郎に白羽の矢を向けたが一筋縄では行かぬと知つてゐるので千田に瀬踏みをさせてみた。その報告は末廣屋もすつかり素人になつて二子縮の着物に木綿の座蒲團といふ體裁で芝居者としてはよい顔も見せないといふのだつたが、勘彌は落膽しなかつた。自分の神戸まで來てゐるのは秘密にして『承諾の見込があるなら太夫元を東京から招く』といふことにして千田の話でなく守田と直接交渉になるやう話を持ちけるやうに命令した。千田が重ねて行くと宗十郎は勘彌の考へてゐたやうに果して『こんな話に太夫元が來ぬのは問題ではない』との口吻を洩らしたのでこゝぞとばかり『話次第ですぐ來ます』と言つたが宗十郎もさるもの『來た所で行くか行かぬかはその上のことだぞ』と念を押した。しかし神戸まで來てゐるとは流石に知らなかつた。勘彌は咽喉から手の出る思ひだつたがすぐに

北向の虎藏、八月は宗十郎の小野道風、大江廣之、花簪屋廣吉で芝翫の駄六二番目が菊五郎の髮結新三であつた。

十二月になると團十郎が戻つてきて芝翫に代つて中の庵へ座り宗十郎に團菊左半四郎仲藏といふ大一座で『黃門記童幼講釋』の切に『街明治世賑』で團菊左の水戸黃門、藤井紋太夫、魚屋久五郎に宗十郎は綱能公夏目主膳、伊豆守であつた。そして河童の吉藏は團菊左とも目きつけてゐた役で黙阿彌は左團次の腹で書き團十郎もしてもよいといつたが勘彌が菊五郎に限るといつた話がある。宗十郎はその後もすつと新富座に主として出演した。

明治十一年は一月が曾我の十郎と頼朝、二月が團十郎の西條高盛の『西南雲晴朝東風』で武ノ上四郎、澤元彦右衛門、寫眞師梅本西洋醫實は雲念であつた。この時局物の大當りを利用した勘彌は新富座の本建築を遂げ六月が楠蒼落したつたがその興行の番附面に就き菊五郎が『團十郎座頭左團次書出し私は是迄座頭をした身分ゆえ一本の中軸、半四郎立女形仲藏實惡』を進言し宗十郎には一語も言及しなかつたので黙殺された彼は『居所のない芝居へは出られない』と勘彌の慰留も聞かず憤然として座を立つた。

しかし十月にはまた新富座へ戻つて中の庵に座り『日月星享和政談』『二張弓千種重藤』に秋阪淡路守、秩父重能等に出て十二月は忠臣藏の一日替りで由良助、師直、判官、若狭、直義本藏、石堂、山名、勘平、定九郎、不破、千崎、一文字屋おかや、おかる、矢間平右衛門の十六役乃至伴内其他を加へた廿一役を宗十郎や團菊左其他が替りあふといふので評判になつたが宗十郎は萬事大阪風の演出で建長寺で演じた若狭が好評、由良之助も駄付は腹帯が道中の路銀といふ悪評だつたが七段目は『かたい石部の』唄が好評で團十郎には及ばずとも菊左以上といふのが六二連其他の評判であつた。切の東京は暫、京都は顔見世大阪が手打といふ三都顔見世の趣向も評判だつた。

は行かなかつた。東京からの時日を見つもつて二三日経つて大阪へ宗十郎を訪ねると、千田の時とは違つて茶菓を饗し縮緬の座蒲團を出す燭臺には百目蠟燭が見々とするといふ體裁で服裝も縮緬の着物に八反の羽織である。内心色氣のあるのを見てめたと思つた勘彌はその色も見せないで時候の挨拶から演劇改良論に及んだ。明治十年といへば薩南の風雲急を告げて西郷南洲の起つた頃である。時世を知り人心を見るに敏な勘彌はうまく宗十郎の心を衝いて宿弊を打破する貴下が東京へ出るの外はないと説いた。しかし、これは兩方とも表面的な理想論で内心はどちらも算盤を弾いてゐたのである。

そこで七十五日の給金の話となり勘彌が二千圓といふのを五百圓せり上げ外に五百圓の即金前借さへ出来れば明日にも神戸へ行き殘金は東京着の上といふ契約が呉服屋だけにあり合せた算盤で忽ち成立したのである。

勘彌はその足で兵庫へ行き手金流しのつもりでそれとなく璃寛に暇乞をしたが、さうとは知らぬ璃寛は妓樓へ招じて馳走をした。無碍にも謝りかねて大酔して旗宿へ歸ると上り口に呉服屋の番頭が大風呂敷を抱えて待つてゐる。いきなりその男が「約束を忘れたのか」と勘彌をどなりつけた。それこそ宗十郎自身が人目につかぬための商人風だつた。翌朝未明に横濱行の汽船に乗り船中で風呂敷から着衣を出した藤井重兵衛はまた中村宗十郎に戻つた。

新富座新築興行の初日は四月十一日。一番目が芝翫の景清で二番目が「富士額男女繁山」で菊五郎の女書生に左團次の御家人直次郎といふ車夫中幕がこれも出場条件の一つであつた宗十郎の盛綱で近八、微妙は仲藏和田兵衛が左團次で他に宗十郎が重忠と神保正道、半四郎が改七屋人丸篝火、清元のかりがねの書卸しで切の隅田川では芝翫と共にどんつくを踊つた。

六月は「一谷嫩軍記」「敵討襤褸錦」「勸善懲惡孝子譽」で春藤次郎左衛門と相摸、芝翫の熊谷、川吾平、加村、朝日山、菊五郎の敦盛、彌陀六、善吉、左團次の義經、六彌太、高市に

註五
染分手網は男重の
非である

翌十二年正月も忠臣藏の打越しだったが大序と二段目を省き代りに九段目と常磐津の關の扉をこれも一日替りで出した。この常磐津の松尾太夫が名人と謳はれた林中の賣出しだった。またこの芝居の前に三井銀行の夜會に出席し宗十郎の翁で菊五郎の三番叟團菊左の勸進帳が出たのが守田勘彌の演劇向上運動の第一歩だったといふことである。

三月は「赤松滿祐梅白旗」「勸進帳」「人間萬事金世中」で足利義教、浦上彈正、島屋尾小太郎、教員増田、新聞社員植地論節、六月は「綴合於傳假名書」「花洛中山城名所」「鞆當」で松平定信、絹商人與兵衛、裁判官、新聞記者、七月は猿若座で「忠孝染分續」「子持高尾松貞操」で伊達新左衛門、座頭慶政、鷺坂左内、夢の市郎兵衛で一座は我童、半四郎だったがこの役々も好評だった。七月にはグラント將軍が來朝して新富座で歡迎會が開かれた時には「後三年記」の清原武衡を勤め、九月の新富座は團十郎、半四郎に市十郎加入で「源平布引瀧」「漂流奇譚西洋劇」宗十郎は齋藤實盛、主馬盛久、領事と外人團十郎は八丁礮、瀬尾十郎、小松重盛、清水の三保藏で勘彌が保守派の菊左を敬遠して旅へ出し團宗兩優を中心に香港より、モシウ、ハリーマン外九名の外人俳優を招いた内外混合劇を二番目に据えたものである。宗十郎、團十郎はこの點では共鳴するものがあつたがまた一面相容れざる點のあつたのは後に説く會我事件である。

十一月の新富座は「鏡山錦櫂葉」で菊五郎の大月藏人、團十郎の戸田大炊、左團次の安宅郷右衛門で宗十郎は浦井主膳、左枝佐渡、長澤隼人、根津八重藏だった。

x

x

x

x

x

x

編輯室

▼八月號は大變遅くなりました。

大阪劇壇は、歌舞伎座の曾我廼家五郎劇を除いた外は、芝居らしいものはなく、浪花座の籠寅演藝陣、中座の有名演藝大會と下旬興行の松竹笑ひの王國に、角座が不二洋子の戟劍といふ陣容で、専ら肩のこらぬ立前で銷

▼本誌は、舞臺人の銃後奉公號として、歌舞伎新派喜劇の各方面に涉り「時局下の銃後で何な風にあなたは國策に沿つた生活をしてみられますか」の回答を集め特輯とした、稽古に舞臺に、更に稽古にと、連日、第一線勇士同様の活躍をつゞける舞臺人の感懐は切に皆様の一讀をすゝめます。

▼渥美清太郎、額田六福、西尾福

夏興行には相應しいもの……

三郎諸先生に依る涼線を行く芝居王國は、秋涼時の芝居に就いての御高見にて新秋に贈る絶好の讀物「夏の道頓堀」は松竹大阪支店の大川瀧江翁の懷舊談で夕刊大阪新聞誌上に發表されたもの、特に本號に轉載いたしました。ついでには、この稿全部を纏めて掲載した、めに、映畫欄、カラセクションを本號に限り割愛したことをお断りいたします。

（S）

皇軍將士の武運長久を祈願し
併せて銃後國策に邁進を誓ふ

會我廼家五郎

大阪歌舞伎座出演

道頓堀 第五百拾三號

定價 一部 金參拾錢
(送料 壹錢)

半年 六册 金壹圓八拾錢
一年 十二册 金參圓參拾錢
(送料 共)

▼廣告取扱 大阪電報通信社
北區中之島二丁目

▼廣告の御用は「電通」又は當編輯部へ御申附の事

昭和十四年八月八日印刷納本
昭和十四年八月十五日發行

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店內

發行兼 鳥江 鏡也
編輯人

大阪市東成區鶴橋北之町一
印刷所 加藤印刷所
電話 天王寺 三三四七番

大阪市西區土佐堀通りノ五
發賣元 株式會社大阪參文社

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹株式會社大阪支店內

發行所 道頓堀社
大阪市南區大寶寺町仲之町六一

道頓堀編輯部



が品問慰なんと ?かるれば喜

部兵恤軍陸?かうせでるれば喜が品問慰なんと際實はで地現
……とすまし致照参を『望希るす關に袋問慰』の表發御

- ◇ 心から慰安娛樂になるもの
子供の玩具、例へば人形、紙風船、智慧の環、ダイヤゲーム、遊戯ゲーム等
- ◇ 餘り氣付かれぬ日用品
耳搔、爪切、安全剃刀、手帳針、糸等
- ◇ 行軍中でも用ひられる食料品
ドロップス小罐、果實罐詰、海苔、調味料等
- ◇ 軽い讀物
ユウモアなもの、短篇讀切小説、銃後美談等
- ◇ 子供の作品その他
童心溢る、手工、圖畫、漫畫、優美な寫真等
- ◇ 誠意の籠つたもの
家庭的温情の籠つた肉筆慰問文、家庭で作られた手藝品等

当店「慰問品賣場」三階
御家庭より御持参の品も
一緒に詰合せ發送御用承
ります

屋島高



ばんな・阪大

業營迄時七後午
業休曜月

的想理なの期劃別能性

成完新

ローレル
スキンローション



脂肪質用

ローレル粉白粉

店商郎次榮田大社會式株

目丁五町本南區東市阪大 社本

昭和十四年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和十四年八月十五日發行(每月一回)
「道頓堀」第十四年第百五十三號

「道頓堀」

第十四年 第百五十三號

壹部定價金參拾錢